東方マギカ

triptych

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方マギカ

【Ｎコード】
Ｎ１１５０Ｕ

【作者名】
ｔｒｉｐｔｙｃｈ

【あらすじ】
東方ｐｒｏｊｅｃｔの二次小説、東方神異譚の主人公が魔法少女まどか☆マギカの世界に殴りこむ。
しかし、主人公は色んな所がおかしくて――？
これは作者が思いつきで始めた、東方ｐｒｏｊｅｃｔ、魔法少女まどか☆マギカ、及びＴＹＰＥ－ＭＯＯＮのクロスです。
クロス元の二次創作とリンクこそしているものの、クロス元がまだこの時点まで進んでいません。
ネタ小説である事を理解してお読み下さる事をお願いします。

第一話　神隠しの先に待つものは？（前書き）

ノリというか創作意欲が抑え切れなくて突発的に書いた作品です。
出来るだけ本筋から外していきたいと思うので、ご理解の程よろしくお願いします。

第一話　神隠しの先に待つものは？

何も見えない目が光を感じ取る。
全ての崩れ去る音はもはや聞こえない。
ただひたすらに、諦める事無く、己に許された光（あす）へと走り続ける。

どれ程の間走り続けたのか、時間の感覚も無い世界では分からなかった。
それは一瞬に過ぎなかったのか、それとも永劫とも言える時を走り続けたのか。
とにかく、遂に辿り着いたのだ。
光の向こう側に足を踏み出す。
世界が色を取り戻した。
耳が音を捉える。
自分という存在を認識（こうちく）する。
そして、霞みがかっていた意識を完全に取り戻し――――――目の前に広がるあまりに異質な世界に思考が停止した。

クレヨンで雑に色を付けられた様な、気色の悪い通路。
天井からぶら下がって蠢いているのは、子供のラクガキが実体化

したかのようなワカメに似た植物。
鼻を突くのは吐き気を催す程に甘ったるい匂い。
漂う空気は肌を刺すかのように冷たく、しかし蜃気楼のように僅かながら揺らめいている。

「幻想郷……なわけ無いよな」

そう呟いて、先程までの己を思い出す。
この異界に一人ただ唖然と立ち尽くしている男性の名は悠。苗字など無い、ただの悠だ。
現在の生活地域は幻想郷。
博麗神社など、境界の境目に立ち入り禁止を宣告された、人里から少しだけ離れて暮らす元人間にして人外。
幻想郷縁起において唯一分類不能とされた、妖怪達の鼻つまみ者にして食べられない人間の筆頭である。
元々外の世界で暮らしていた悠には、これが外の世界ではない事ぐらい分かる。
人間の精神はここまでトチ狂ってはいなかったし、そもそも外の世界であのような植物かどうかすら疑わしい物が存在を保てるなら、幻想郷は結界で覆われてなどいない。
ならば、と知識から外の世界ではない異界を引き上げてみる。

冥界。幽霊が成仏か転生を待つ世界。
半人半霊の庭師曰く、幽霊ばかりで生きている存在は基本的にいないものの、春には見事な桜が咲く場所らしい。
そのあまりの美しさに転生や成仏を忘れてしまう幽霊までいるという。
庭師である彼女の感性は極普通の物だ。流石にこんなデザインを

施したりはしないだろう。

魔界。魔界神によって創造されたとされる世界。
悪魔や魔法使いの故郷にてメッカ。吸血鬼や魔法使いに知人はいるが、ここまで美的感覚は狂っていない。
ある程度は常識という物を弁えている彼女達の故郷がこんな世界だとは思いたくない。

彼岸。もしくは地獄。死者が訪れる死後の世界。
悠は仏教の教義に存在していないので、例え死んだとしても彼岸に渡る事はない。
旧地獄である地底は伝え聞く話ではまともなので、新地獄もここまで酷い有様ではあるまい。
むしろ、死者に対してサービス精神まで持っているらしいので、支配者たる十王達の頭がイカれている訳でも無いだろう。

天界。冥界の遥か上にあると言われる世界。
歌や踊り、釣りなどを楽しみ、最高の料理や桃、酒を自由にかっくらって日々遊んで過ごしている天人の世界。
神や成仏した幽霊、もしくは仙人の内修行の末に解脱した者が住まう地である。
天子がいくら不良天人だと言われていても、ここまで異常な世界に住んでいるという事は無い筈だ。

月。
まだ地上にいた頃の永琳達は、技術こそ優れていたものの見かけは昭和初期よりなお古い。
穢れの無い地で暮らす以上、このように大きく変化するなどあり得まい。
むしろ、こんな所を月だと勘違いした日には永琳に抉られる。物

理的にではなく精神的に。

隙間の世界。

八雲紫が開く空間の裂け目の内部。確かに一番異質な世界ではあるが、悠には入ることが出来ない世界だ。

とはいえ、外から見る限り無数の目が縦横無尽に並んでいるだけの世界であり、ここまで雑過ぎる配色はされていない。

結論としては、今まで誰にも知られていなかった世界である可能性が高いと言えよう。

もしくは意図的に悠には教えられていなかった世界の可能性もある。

悠は高位次元の異法則を宿した異端である。

悠が知るだけで他に危険をもたらす知識などもあり、そう言った事は妖怪の賢者から緘口令が敷かれている。

そうでなくとも、論理的な結界を知らぬ内に破壊してしまうため、幽明境や博麗神社などの結界の境には近付かないようにきつく言われているのだ。

平穏な日常を求めるならば、いつも通りちょっとした何でも屋を相方と営んでいるだけでいい。

守矢神社が幻想入りしてからは妖怪の山に出入りするようになったものの、無縁塚のような世界が交差するような地域に立ち入った憶えも無い。

そもそも、悠は普段どおりの行動をしていた筈なのだ。

そうなると、神隠しに遭った可能性が最も高い。

神隠しの主犯と呼ばれる妖怪の仕業でなくとも、異界に迷い込む事はあり得ないわけではない。
その可能性がゼロでない限り、偶然別世界に迷い込むという事は起き得る事象なのである。

そこで、ふと不安になる。
今まで悠はダメージらしいダメージを負ったことが無い。
なぜなら、悠の内側の法則と世界の法則が異なっているせいで、悠の体表という異なる法則の境は両方の法則によって守られ維持されるようになっているからだ。

だが、この異質な世界においても悠という異質は異質のままなのか。
この世界でなら、死を迎えてしまう事もあるのではないか。

――確かめるしかない。

右腕を後ろに振りかぶり、塗り残しや塗りムラだらけの壁に思い切り掌底をぶち当てる。
音は無い。
衝撃も無い。
かといって壁に変化も無い。
いつも通り、反作用として生じる力が消滅させられたようだ。
壁に変化が無いのは、単に悠の腕力が低いせいである。
力ある妖怪や人間ならこの程度の壁を壊す位わけはないだろう。

自分の安全を確認したところで、ふと気になって天上からぶら下がるワカメを掴み、引っこ抜く。

同時にワカメは天井から抜け落ち――根の様な三本の足で見事に着地した。
黒い球体のような身体から三本の足とワカメのような植物が生えたその生物は金切り声を上げる。
次いでそのワカメから緑色の大きな泡を幾つも飛ばしてきた。
慌ててその場を飛びのくものの、一つの泡が右腕に当たり、竹が破裂するような音が響く。
特に衝撃は感じない。
泡が破裂する事で飛び散った緑色の液も、身体や服に貼り付く事無く床に滴り落ちる。
仕返しに悠の背の半分ほどもあるその生物を蹴りつけると、大きさの割に重量は大した事無くあっさりと向こうに転がって行った。

しかし、やはりダメージは与えられていないようで、生物はワカメを使って器用に起き上がる。
同時にぞろぞろと同じ様な生物が通路の前後から五、六対ずつ現れた。
どうやら先程の金切り声は仲間を呼ぶための物だったようだ。
状況はかなり悪い。
おそらく悠に攻撃は通じない――――が、あくまで攻撃が通じないだけなのだ。
捕まってしまえば離脱することは出来ず、殺されぬまでも自由を奪われる。
そして、それこそが問題だ。
悠を拘束する事は幻想郷の妖怪達も禁じられている。
自由を奪う事が悠の抱える異法則の流出の切欠になりかねないからだ。
高位次元法則による下位次元法則の汚染と改変。それが行なわれれば世界の全てが変質、変貌する。
だがこの知性の低い生物にそのような事を理解するなど期待出来

ない。
この生物とて不気味な異形であるものの、この場における異物は悠の方だ。
いきなり世界の外からやってきた存在に世界全てを侵し尽くされました、なんて結末を押し付けるわけにはいかないし、下手をしたら法則汚染が元の世界――幻想郷にまで及ぶ危険性がある。

幸い、今の所挟み撃ちをかけてきた生物達は体を傾けてワカメをこちらに向けていた。
効果の無い事が実証されている泡が視界を埋め尽くすが、怯えを押し殺してそれに向かって走り出す。
弾けた泡を気に留めないようにその中を突っ切り、立ちはだかる生物の一体を跳び箱の要領で跳び越えた。
包囲を抜けるそのままの勢いで通路を走りぬき、西部劇映画のバーに出てくるような両開きの木戸らしき物を体当たりで押しのけた先で――――

「ティロ・フィナーレッ！！」

――――半球上のドームみたいな広場の中央で、頭の両サイドにある縦ロールが妙に印象的な小柄な少女が、拳銃に似た形の大砲をトマトのラクガキみたいな巨大生物にぶちかましていた。

これは、魔女と魔法少女、そして一人の少女を巡る運命が捻じ曲がる物語である。

第二話　イレギュラー×イレギュラー

巨大なトマトのラクガキは、黄色の洋風な衣装を纏った少女の一撃を受け、爆散した。
そう、爆散である。
見た目は巨大な拳銃なのに、発射された物は着弾した瞬間に炸裂し、巨大な爆炎と轟音を撒き散らしたのだ。
悠の知る限り、銃弾とは貫く事はあっても爆発はしない。
普通爆薬を仕込んだ弾丸を放とうとすれば、引き金を引いたその瞬間に手元で銃ごと爆発する。
たった六十年程度で外の世界の科学はここまで進歩したのか、と驚いていると、クレヨンで乱雑に塗りたくったような景色が揺らぎ始める。
そして、数秒もしない内に悠は外の世界で言うところの校舎裏らしき場所に立っていた。
先程の少女と並んで。

「……え？」
「……よう」

唖然とした顔で呆けたような声を上げる金髪縦ロールの少女に、とりあえず右手を上げて挨拶をする。
同時に、違和感を覚えた。
何に対してかは分からない。
だが、確かに何かがおかしかった。

しかし、その疑問は風に霧が吹き飛ばされるかのように消え去る。
それでも、疑問が失われた後も言い様のない気持ち悪さだけが心の片隅で渦巻いていた。

「あ、あのっ！」
「ん？」

掛けられた声に、唐突に現実へと引き戻される。
見れば、黄色く派手な洋服を着た先程の少女がこちらを青ざめた表情で見つめていた。

「あの、その……見ました？」
「あー、すまん。どれの事だ？」
「え？」

疑問に疑問で応酬する二人。
とりあえず落ち着かせようと少女の頭をぽんぽんと軽くたたく。

「落ち着け、どうどう」
「ちょ、馬じゃないんですから！」

落ち着かせようとしたこちらの態度は彼女の気に障ったらしく、頭に乗せた手をパシッとはたき落とされた。
背丈からして十二、三歳程のように見える。この世界の多感な年頃の少女はこういった子供扱いを嫌がるらしい。
幻想郷ではどうなのかと聞かれると、見た目十歳程度の少女でも大量に酒を飲んでいる上に見た目と年齢がつりあっていない。
人間に限定してみても、人里の少女は物怖じをしない性格の子が多い。
なら里の外の人間の少女はと聞かれると、もはや性別以前に人間

として論外である。
唯一まともだと思っていたあの頃の早苗ももういない。彼女は既に幻想郷に染まってしまった。
とりあえず、酷く狼狽している様子の目の前の少女に考えを戻す。
「で、見たっていうのは一体どれの事だ？」
「その、とりあえずあなたが見た物全部教えてください」
見た物、と言われて思い返す。
クレヨンで塗りたくった様な通路。泡を飛ばす謎の草。そして巨大な大砲を放つ目の前の少女。そして粉砕されたトマトのラクガキ。
それらを伝えると、ただでさえ緊張していた少女の顔がさらに強張った。
「えっと、その、見てしまった事は全部内緒にしてください！」
必死に頭を下げる少女の勢いに流され、とりあえず頷き返す。
それを見た少女はようやく安堵の息を付いた。
そして少女の洋服が光り、黄色で統一された服から外来人の着ているような服へと変化する。
そのまま悠の背後に落ちていた黒いアクセサリーの様な物を拾い上げる。
「なあ、内緒って事は、アレって殺しちゃ拙い奴だったのか？」
「へ？」
こちらの質問に対し、面食らった様にぽかんと口を開ける少女。
「ほら、あのラクガキみたいな変なの」
「……ううん。殺さないと大変な事になるの」

「ふーん」

妖怪と人間みたいな関係だろうか。

妖怪は人間を襲い、人間は妖怪を退治する。この姿勢の維持こそが両者の共存に必要なのだとか。

今の幻想郷ではもはや形骸化しているが、それでも人間を食料にしている妖怪は多い。特に外の人間から見たら妖怪は殺すべき存在に他ならないだろう。

尤も、あの奇怪な生物は妖怪とは全く違う。

閉じているというか、もう先には進めない存在。もう終わってしまっていると言い換えてもいいかもしれない。

「あ！」

「……どうかしたんですか？」

先程の空間に繋がっていたであろう壁を触るが、再び入り込めそうな気配は無い。

とりあえず、心配そうに声をかけてくる少女の優しさにすがってみる。

「あんた、さっきの異界へもう一度入ることは出来るか？」

「無理です。さっきの結界を張っていた魔女は倒しちゃいましたから」

魔女。悠の知る魔法使いと言えば、白黒と人形遣い、そして図書館の魔女や寺の僧侶くらいだ。

性格及び人格に難はあるものの、基本的に彼女達の姿形は人間と区別がつかない。

そのためか、少々あの生物を魔女と呼称するには抵抗があった。

「どうやって帰ろう……」
「あの、どうかしたんですか？」

心配そうな、というよりどこか可哀想な人を見る目で声をかけてくる少女に、ここは何処かを訪ねた上で、幻想郷の事は伏せて神隠しに遭った事を話す。
少女の話によると、どうやらここは外の世界の日本、しかも幻想郷とは距離がある地域らしい。

「電気も無い様な田舎から……？」
「ああ。俺が気が付いた時にはもうあの中にいた」
「ちょ、ちょっと待ってください！」

少女は黄色い卵形の宝玉を台座に嵌めこんだアクセサリーを取り出し、額に当てて目を閉じる。
しばらくして少女はその宝玉を額から離すと先程拾った黒いアクセサリーを宝玉に押し当て、次の瞬間には宝玉が彼女の手から消え失せていた。

「……あの、変に思わないんですか？」
「何を？」

不安そうに尋ねる少女には悪いが質問に質問で返す。
悠には変に思っている事など、自分が何故このような場所にいるかという事ぐらいだ。

「あの、魔女の事とか、結界の事とか、今のソウルジェムの事とか……」
「何か変だったか？」

ラクガキのような存在は悠が始まった瞬間に会ったことがある。
とは言ってもあの生物の様な塗り残しの無い、もっと二次元的でありながら高次の存在という矛盾を体現したモノだったが。
結界も、デザインした存在が存在だけにあのような人間の理解の範囲外の物であっても違和感は無い。
何も無い所から物を出したり消したりするのは、里で悪い意味で有名な銀髪メイドがたまに同じ様な種無し手品を披露する事がある。
妖怪ならともかく、人間なら外の世界でも異能を持つ者が生まれてもおかしくない。
現に東風谷家のような特殊な血と力を現代まで伝えた一族が存在するのだ。力を隠し世に紛れ、普通の人間として生活している異能者が居たところで何の不思議があろう。

「いえ、一番変なのは貴方の頭だと思います」
「酷えな、おい！」

直球で暴言を突きつけてきた少女の頭を軽くはたく。
だが、それでも少女はおかしそうに、そして楽しそうに笑い続ける。

「――なるほど。確かにこれはイレギュラーだ」

不意に背後から掛けられた声。
振り向いた先には、これまた奇妙な生物（なまもの）が存在していた。
ネコのような四足の白い動物。
ただし、耳は一種の兎や犬の様に長く、さらにその両耳を通す形で金属の輪が浮いている。
赤い目もまるでぬいぐるみの様に真ん丸だ。
尾もネコよりはるかに太い。尾だけを見るとどこぞの狐を思い出させる。

「人間の形をしているけど、中身は別物だね。それにとてつもない因果を背負っている。君のような存在を見るのは初めてだ」
「――ああ、こっちもお前みたいな存在を見るのは初めてだよ」

喋る獣は見飽きている。悠の異質さに気付いた者がいなかったわけでもない。
だが、目の前の生き物は違う。決してこれは己と相容れない。
いや、そもそもこれを生き物と評していいのかどうかすら疑問だ。
なぜなら、この白い生物は知恵を持つくせに、善悪といった観念を内包していない。
高い知恵を持った妖獣は、人間を理解する内に善悪という概念も学習する。
少なくとも、人と交流を持つ妖獣は皆そうだ。永遠亭の妖怪兎達だって善悪ぐらい知っている（悪と理解しながら悪戯をするが）。
だからこそ、この白い生物は異常なのだ。
人の言葉を使える以上、人間について学習している。
にも関わらず、こいつは人間の持つ善悪という観念に一切共感していない。
これならまだ善意で他人を傷つけるような異常者の方がマシというものだ。

「キュゥべえ。来てくれたのね」
「うん、マミからのお誘いだからね。だけど、本当に不思議な存在だね、彼は」

生物は少女の事をマミと呼ぶと、その足元にすり寄りその隣に並ぶ形でこちらを見る。
気分はカメラで覗かれているようなものだろうか。いや、カメラは天狗の悪意が裏にある分まだマシだ。

実験動物のようにただただ観察されるのだから、苛立つのも当然だろう。
ふと、また違和感が生まれる。
しかし、その違和感も何に対して抱いたのかすら明確な形にならないまま、頭を急激に駆ける感情のノイズに掻き乱されて消えてしまった。

「……ねえ、キュゥべえ。さっき、この人が人間じゃないって言ったの？」
「そうだよ。彼は人間じゃない。……とはいえ、確かに外見は人間そのものだ。この世界には人間以外にこれ程はっきりした感情を持つ生命はいなかった筈だけど」

少女の目がこちらを警戒する物へと変わる。
だがその瞳には同時に困惑と怯えが含まれている事も分かる。
正体不明を恐れる辺り、この少女は真っ当な感性を持っているのだろう。
守矢家の風祝さんが既に常識を投げ捨ててしまっている事がひどく残念に思えた。
守矢神社一家が早苗の将来（特に婿）を心配しているのに対し、今の彼女はとてもはっちゃけた生活を送っている。
彼女を思えば、目の前の少女とは話し合いで片を付けられそうに思えてしまうから不思議だ。

「……なんですか、その目は？」

気が付けば少女はその手に長い銃（それも単発式）を持ってこちらに構えていた。

「別に失礼な事を考えていたわけじゃない。久々に真っ当な人間に

会って気分が良いだけだ」

向けられる悪意が心地良い。

幻想郷では妖怪にこそ警戒されているものの、人里の人間は悠に怯える事は無い。

それが信頼か舐められているのかは判断しないでおきたいところだ。

「武器を向ける人間が真っ当？　貴方、どうかしてるんじゃない？」

「いや、異能を使える人間は俺みたいな雑魚を相手にしないからな」

事実である。

飛べないし弾幕も張れない悠に回って来る仕事は採取や護衛が関の山なのだ。

酷いのになると、マスタースパークの的になるという依頼が来たこともあった。勿論その報酬は茸である。

「答えて。貴方は何？」

「元人間。今の扱いは分類不能」

今度は敵意もなく真っ直ぐに質問をしてきたので、こちらも事実をそのまま答える。

「……ふざけてるの？」

「本気だよ」

両手を挙げて抵抗の意志が無い事を示す。

少女は小さく息をつくと静かに銃を降ろした。

「キュゥべえ？」

「嘘は言っていないみたいだね」
「そう……」

余程あの生物を信頼しているのか、少女は銃を手から離す。
銃は重力に引かれて落下し、地面に着くより早く光となって消えてしまった。

「キュゥべえ。この人――――人でいいのかしら？　とにかくこの人は遠い場所から魔女の結界に突然取り込まれたみたいなの」
「それも初めてのケースだね。魔女は固定した結界に近付いた人を取り込むことはあっても、離れた場所にいる人を距離を無視して結界内に取り込むなんて普通は不可能だ。だからこそ魔女の口付けなんて手段を使うんだから」

まぶたを開けたり閉じたり、耳や尾の動き、そして声のアップダウンで感情を表現している生物が気持ち悪い。
興味を持って興奮している様に外見を整えているが、あくまで抱いているのは関心だけだ。そこに感情は存在していない。
あまりにも不自然なこの生物は、もはや妖怪とは比べ物にならない程おぞましい存在だ。
だが、現状を打破できる鍵を握っているのもこの生物しかいない。

「で、俺はどうやったら帰れるんだ？」
「残念だけど、それは僕にも分からない。だって、君のような存在がいたなら僕はとっくに気付いていた筈なんだ」

幻想郷に悠が隔離されたのは戦後の話だ。
となると、考えられるケースは二つ。
悠が幻想郷に入った後にこの生物が日本を訪れたか、ここが悠の知る外の世界によく似た別の世界であるか、だ。

この場合は後者の説で行くべきだろう。前者で話をすると、この生物が幻想郷にまで手を伸ばしてくる可能性がある。

「どうやら、ここは俺の知る日本とは違う日本みたいだな」
「そうなると、君の正体は並列世界旅行者かい？」
「不本意ながら、な」

両手を挙げたまま、たっぷりの悪意を込めて白い生物に話しかける。

しかし、それは無意味に終わった。そもそも、悪意や善意をぶつけたところでこの生物は返す物を持ち合わせてはいないのだ。

生物は気にした素振りも見せず、にこやかな表情を作りこちらに向けてきた。

「マミ。彼は僕達も魔女も存在しない世界からやって来たらしい」
「……え？」

理解出来ないのか理解する事を拒んでいるのか、少女が唖然とした表情をさらす。

やがて頭（かぶり）を振った彼女は視線を悠から生物に移した。

「元の世界に帰してあげられないの？」
「不可能だよ。観測する事すら不可能な世界に干渉なんて出来るわけがない。ただ――」

生物が一瞬言葉を溜めた。

同時に言い様の無い悪寒が背筋を駆け抜ける。

「――条理を覆す奇跡の力なら、その願いを叶える事も可能かもしれないね」

その言葉は、どこかで聞いた呪いの言葉の様だった。

第三話　変革される運命（前書き）

かなり前に書き上がっていたんですが、同時投稿しようとした番外編に夢中になりすぎました。

次話はまた少々遅くなります。申し訳ありません。

第三話　変革される運命

日が暮れてきたため、巴マミと名乗った少女と生物（なまもの）に連れられて彼女の家で詳しい話をする事になった。
キュゥべえと名乗った生物は、魔法の素質を持った少女にしか見えないらしい。
実際、マミの肩に乗る生物に一瞥もくれる事無く、通行人達はマミの横を通り過ぎていく。
なら悠には何故見えるのかと尋ねると、イレギュラー過ぎて推測が立てられないそうだ。

家族に不審に思われるんじゃないかと心配したところ、もう家族はいないからと若干小さな声で返事を返された。
地雷を踏んだ事に若干気まずくなるが、当たり障りない様にそうか、とだけ返事をしておく。
同情で人は救えない。それよりはまだ尻を叩いてでも前に進ませてやる方が救いになるだろう。

案内されるまま、マミの家に入った。
部屋には様々なインテリアが置かれていたが、家族がもういない事を考えると数ある物が逆に孤独を煽っているような気さえしてくる。
無用心すぎる態度にも何となく納得がいった。
魔法少女と魔女。その本質は分からないものの、彼女にとってそ

れは隠さねばならないものだ。
それら全てを受け入れた悠に、彼女は期待しているのだろう。自分の孤独を埋めてくれるかもしれない存在として。

今、マミは台所で夕飯の用意をしてくれている。
お人好しとはまた違う、代償行為としての親切。
それが分かるだけに、テーブルの対面に座っている生物がますます気に入らない。
およそ人と相容れない存在が、わざわざ人間にすり寄って来ている。
そこに悪意がない事が、なおさらこの生物の異質さを強調していた。
初めてこれを視認した時から抱いていた殺意を、決して零さないように胸の奥に押し込める。
まだ解放するには時期尚早というものだ。
殺害対象でない筈の生物に抱いた殺意は、相容れないが故に排除しようという人の本能に他なるまい。

「悠。君は元人間だと言っていたね」
「ああ」
「なら、君はどうやって人間からさらなる高次の存在へとシフトしたんだい？」
「憶えてねえよ。気が付いた時には俺はもう俺だった」

嘘は言っていない。それ以上の事実は悠という存在の認識の外にある。
それを確かめるためには、悠という殻を割ってしまう必要があるだろう。

「残念だ。君は過去に例が無い程の因果を抱え込んでいるというの

に」
「過去？　いつからお前は日本にいるんだ」
「ここにいる僕は二十五年程前からだね」
探りを入れると、奇妙な答えが返ってきた。
まるでこの生物には同類がいて、かなり昔から活動してきたとでも言いたげだ。
「じゃあ、お前らはいつから行動しているんだ」
「僕達の活動、そして魔法少女と魔女の戦いは有史以前から続いているよ」
これで確定した。ここは外の世界によく似た、しかし決定的に違う別の世界だ。
悠が永琳に幽閉され、やっと外に出られた時には既に農耕が始まっていた。
弥生時代から長い時を経て、一度もあのような『魔女』なる異形に出会ったためしなど無い。
大体、あのマミ程度の破壊力で殺せる程度の相手なら、神霊が力を持っていた頃に全ての魔女は死滅させられている筈である。
日本という小さな島国の国津神ですら山を砕く力を持っていた。
神に守られた人間に魔女が手を出した途端、その魔女の末路は決定されたも同然だ。
それが、今まで生き残っている時点で矛盾が発生する。
「人間以外の感情を持った存在――神や妖怪みたいな存在はいないのか？」
「いないよ。この世界の知的生命体で強い感情を持っているのは人間だけだ。君の世界には神と呼ばれるような存在が居たのかい？」
「ああ。むしろお前みたいな存在の方がよっぽど異端だ。自分が人

間に受け入れられないことぐらい分かっているだろう？」
「だからこそ、僕達は人間とより円滑にコミュニケーションを取れるよう努力しているんだけどね」

だろうな、と呟いて顔を背ける。
この生物は悪という概念を持たない故に、善という概念も持ち合わせていない。
価値観の根底から異なる存在が、こちらの価値観に合わせる理由。
そんな物、あちらの価値観において有益であるからに決まっている。
確かめなければならない。この生物の目的を。

「あら、私一人を除け者にしないでもらえるかしら」
「とと、すまん」

マミが持ってきたのは鍋物。
まだ春になったばかりで寒いのと、鍋物は誰かと食べるからこそ美味しいというのが理由だそうだ。
二人で鍋をつつきながら、この世界の情報、特に魔女と魔法少女についてを詳しく説明してもらう。
ちなみに生物にはマミがちょこちょこ箸で具材を食べさせていた。

「絶望と呪いから生まれた魔女、ねえ」

この世界では負の感情から妖怪の代わりに魔女が生まれるらしい。
そしてそれを倒すための存在が魔法少女だとマミは語った。

「魔女を倒すために命を懸けろって事か？」
「あくまで同意の上で契約は行なっているよ。それに対価は前払い式なんだ」

魔法少女になるための契約の際には、どんな願いでも一つだけ叶えて貰えるという。
胡散臭い事この上ない。
実際、幻想郷でも願いを一人だけ叶えるという詐欺が行なわれた事があるだけに、なおさら疑わしく思えてならない。
なにより、願いを叶えるという謳い文句自体が贄を奉げる儀式を連想させてくる。
エサはキュゥべえ。集まるのは素質を持った少女達。ならば狙いは引き起こされる奇跡そのものと言ったところだろうか。

「奇跡を起こすお前らのメリットは何なんだ？」
「さっきから説明しているじゃないか。魔法少女になって魔女と戦ってもらう事だよ。戦いの運命を受け入れてでも叶えたい願いを、僕達は実現させる。その事に嘘偽りは無いよ」

感情が無いために嘘の有る無し、裏の目的などは探れそうも無い。
懐疑的な視線を生物に向けていると、マミが小さく笑い声を漏らした。

「願いを叶えてくれるのは本当の事よ。私もそのおかげで生きていられるのだもの」
「……それは死者の蘇生や摂理に打ち勝つ事も可能なのか？」

その問いかけに生物は首を横に振る事で答えた。

「叶えられる願いの大きさは抱え込んだ因果の総量によって決定される。その大きさ次第では蘇生や摂理の改変も可能ではある。尤も、そこまでの因果を持った存在は君が初めてだ。逆に、どれほど大きな因果を背負っていても、魔法の力と性質は叶えた願いに左右され

てしまうけどね」
「つまり、素質のある人間に叶えられる最大限の願いを実現する事で、力の強い魔法使いを生み出すという事か？」
「その認識に間違いはないよ」

どこか引っ掛かる言い方をする生物は、マミから肉をもらって咀嚼している。
だが、やはり腑に落ちない。きっとどこかに見落としがある。

「じゃあ、魔女を倒してお前達に何のメリットがある？」
「とりあえず人類が存続するね。奇跡を起こし、魔法を使えるように成れるのは今のところ人類しか存在しない」

その言葉を聞いて一応押し黙る。
人類の存続の為に魔女は邪魔というのが名目。
人間を魔法少女にして対抗させるというのが手段。
ならばその目的は、契約を結ぶ際の奇跡の発現、ないし人類の存続によって生み出される何かといったところか。
当たらずとも遠からず、といったところな気がする。
とはいえ、この生物に気を許してはいけない。
理由は自覚できないが、この生物は人間にとって害であるという確信がある。

「で、何で少女限定なんだ？」

その理屈で言えば、マミのようなただの中学二年生よりも権力や財力の高い、他人への強い影響力を持つ人間を選んだ方が効率的な筈だ。
わざわざ少女限定にする理由が掴めない。

「効率が良いからさ。調査の結果、第二次性徴期の少女が最も大きなエネルギーを生み出す事が出来る」
「利用しやすいからって事か？」
「勿論、少女に限る理由は他にもあるよ。君たち人間、特に日本人は成長すれば戦いへ踏み出す事が出来なくなってしまう。様々なしがらみが戦いへ二の足を踏ませてしまう事になるのさ」
「戦う事は不幸だって認めてるよな、それ」

相変わらず頑なな態度を取り続けるこちらに対して、生物は呆れた様にため息をつく。

「さらに言うなら、願いは単純でなければいけない。自らの望んだ未来を完全に実現させるには、世界全体、さらには過去現在未来全てへの干渉が必要になってしまう。流石にそれ程の因果を持つ存在は今までいなかった。だから、願いの範囲を限定する事でようやく奇跡は叶えられる規模の事象になる。一つの事を純粋に願い、そのために身を戦いに投じる事が出来る想いの強さという面からも、僕達は第二次性長期の少女を選んだのさ」
「で、俺の願いを叶えないのも同じ理由か？」
「そうだよ。君の願いは元の世界に帰る事だろう？　だけどその願いを叶えたら、君は魔女と戦ってくれないじゃないか」

やれやれ、とばかりに首を振る生物にさらなる殺意が湧く。
願いを叶える叶えない以前に、こうして感情表現を表面上だけ真似ている事がどうも気に食わない。
だが、この答えで奇跡を起こす過程で生じるエネルギーを掠め取るという線は消えた。

「なら、資格の有る少女であっても、お前達に不利益な願いだったら断るのか？」

「いや、それじゃあ僕達が嘘を吐いてるみたいじゃないか。願い事の内容に僕達は関われないし、助言をする事だって禁じられている。無論こちらから契約を持ちかけておいて一方的に反故にするなんて事は無いよ。僕達はあくまで対等な立場でお願いしているだけさ」

つまり、悠の場合は元々対象外の存在だからこそ断れたのであり、この生物は一度契約を申し出たら断る事が出来なくなる、という事だ。

一応念を入れてこの事は記憶しておく。いつかどこかで役に立つかもしれない。

ふと前を見ると、マミがやや不満げに苦笑していた。

「疑り深いのね」

「大人だからな。契約の前に重要な事は全て把握しておくべきだろ？　大体、こいつは違う生き物だ。人にとっては重要な事が、こいつらにとってはどうでも良い事として扱われていたら大変な事になる」

「私には、そんな事を考える余裕なんて無かったなぁ」

生物の口に冷ました具材を箸で食べさせてから、マミが箸を置いて宙空へと視線を移す。垣間見えた感情は未練。

どうやら昔話を始めてくれるらしい。

今までこの手の話題を相談できる人間などいなかったのだろう。

同情などする気はないが、一応聞き届ける事にする。

「数年前の話になるわ」

語り出したマミに頷き返しながら鍋の野菜をつまんで皿に移す。

結構失礼な態度を取っている自覚はあるのだが、彼女は苦笑を浮かべるだけで文句をつける様子は無い。

むしろ機嫌が良くなった様にさえ見えるから不思議だ。

「家族でドライブに行ってね、大規模な交通事故に巻き込まれたの」

先程皿に取った野菜を口に入れ、咀嚼しながら視線を生物の方に一度向けてから、再びマミを見る。

そこで彼女は、こちらの確認に頷いて答えた。

――つまり、この生物はそこにつけ込んだ。

「だから私は願ったの。助けて……ってね」

「で、生き延びられたんだろ？　何か後悔でもあるのか？」

その言葉に彼女は首を振って否定のサインを示す。

それに対し、小さく適当な相槌を打って答えにした。

「あの時の私はそれ以外の願いなんてなかったから。だから、今度は私の手で少しでも多くの人を助けるの」

「ご立派なこった」

本当に、強(よわ)い人間だ。

ただの強がりで、余りに脆い虚勢で、外面だけを整えながら、彼女は前に向かって進んでいる。

しかし、一つ彼女は間違えている。

その助けるという行為を責務として勝手に背負い、それに寄りかかり過ぎている。

それでは、彼女の生が報われる事はない。

「だったら、掴み取った生を謳歌しろ。生きる事を称賛して助けに行けよ。負い目から助けてたんじゃ、誰よりもお前が救われない」

「……え？」

投げかけた言葉に呆然とするマミ。
だが、せっかくここまで腹が立ったのだ。遠慮なく言ってやるのが筋というものだろう。

「寂しいなら一緒に笑ってやる。誰が否定しても、お前自身が拒絶しても、俺がお前の生を肯定する。お前が生きているのには価値があるって、何があっても認め続けてやる」

理解が追いついていない様子の彼女に構わず言葉を投げかける。
やがて言葉の意味が判ったのか、力なく彼女は首を横に振った。

「ダメよ、そんなの。私は生きる代わりに戦う運命を受け入れた。だから、誰かを助けるのは当たり前の事じゃない」
「アホだな」

これまでのマミの在り方をばっさり切って捨てる。
こういう人間にはこのぐらい強く言ってやった方が効果的だ。

「あ、アホ！？」
「アホじゃなきゃ馬鹿だ。そんな義務感で人を助けてもしょうがない。人を助けるなんてことは、自分を助けるついでで良いんだよ」
「でも！」

言いつのるマミに向けて右手を構え、中空に向かって中指を親指にかけて弾く。
同時に彼女はのけ反って額を抑えた。
名付けるなら遠隔デコピン。
マミの涙目な姿が年と相まって微笑ましい。

「いいか？　その生きたいって願いは貴いものだ。それを叶えたお前は幸せになるべきなんだ。それでも誰かを助けたいと言うのなら、せめて自分の心を認めてからにしろ」
「自分の、こころ？」

彼女は数年前に契約したと言った。
ならば、それから今までずっと戦い続けてきた事になる。
そのあまりにも脆い支えを叩き折り、もっと強固な芯に入れ替える。

「要は、オマエはまだ子供だって話だよ。綺麗事を好むのは良いが、大切な所から目を逸らすな」
「綺麗事の何が悪いのよ！」

激昂するマミの額に、追加で遠隔デコピンをお見舞いした。
勢いを殺された彼女に、すかさず追い撃ちの言葉を追加してやる。

「獣は本能に生きる。妖怪は欲に忠実に生きる。――じゃあ、人間を動かす原動力は何だと思う？」
「……こころ？」
「正解（ザッツライ）」

先程叩きつけられた言葉から引き出したのか、それとも自分で答えを捻り出したのか、とにかく彼女は
正解に辿り着いた。
小さく拍手してやると、呆気に取られた様な表情を見せてくれる。

「より正確に言うなら感情だな。人間を動かすのは感情で、そこに理由を付けるのは単なる言い訳だ」
「わ、私は助けたいから助けているの！」

「なら、もっと楽しく生きろよ。助けた見返りを受け取れないようじゃ、せっかく繋いだ命が勿体無い」

そう、助けたくて助けたのなら、それは立派に自分のためだ。決して誰かに恥じる必要なんて無い。

「見返りって、何の事？」

「簡単だ。人を助けるのは自分の為でなくちゃいけない。純粋に人を助けたくて助ける奴は、もっと幸せそうに生きるんだ。人を助けたのに、そんな辛気臭い顔してたら楽しくないだろ？」

「……良いのよ。誰かを助けられるから、今私は生きてる価値があるんだって思ってる」

自嘲する様な笑みと共に、マミは小さな声でそう答えた。

それが、おそらく彼女の支え。

自分の為に奇跡を祈った彼女が勝手に背負った、他人への引け目に負けない為の芯。

「だから、言ってるだろ？　お前が生きてる事は、ただそれだけで貴いんだ。せっかくの生き延びたんだ。幸せに生きなきゃせっかくの奇跡が台無しだろう」

「……じゃあ、自分の為に他人を犠牲にしろって言うの？」

「は？　何でそんな結果に飛ぶ？」

呆れ声を出し――我関せずといった様子で丸くなっている生物を睨み付ける。

「どういう事だ」

「魔法を使えばソウルジェムに穢れが発生する。その穢れを拭い去るには、魔女を倒した時に手に入るグリーフシードが必要なんだ」

「……で、同類と取り合いになるってか？」

ついうっかり生物を殺してしまいそうになる自分を抑える。
多分、これを殺しても意味が無い。
この生物は自分が殺されることに何の関心も抱いていない。
おそらく、自分の代わりに別の仲間が来れば良いなどと思っているのだろう。
力いっぱいに右手を握り締めていると、マミが顔を上げて強い意志の篭った目でこちらを射抜いてきた。

「それだけじゃないわ。魔女の使い魔は、人を殺して元と同じ魔女に成長するの」
「――ち、そういう事かよ」

要するに、使い魔を成長させるために一般人を犠牲にする輩もいるという事だ。
席を立ち、勘違いしている子供の傍に行って、その頭を強めにはたく。

「痛っ！？　もう、さっきから痛いじゃない！」
「お前が馬鹿な事を考えているからだ」

マミの目の前に座り、真っ直ぐ目線を合わせる。
それだけで気圧されるように彼女は僅かに視線を揺らがせた。

「自分の為に誰かを犠牲にしろなんて言わない。それを選んでも後悔しないって言うなら構わない。だけど、お前はそんな生き方じゃ幸せになれないだろ？」
「当然でしょ。そんな生き方、私は許さない！」
「だったら、自分の為に人を助けろよ。人を助けてお前も幸せにな

るのが一番なんだから」

目を白黒させて面白いほどに混乱するマミ。

無防備になった彼女へ一気に止めを刺しに行く。

「何度でも言うぞ。生きたいという祈りは貴いんだ。だから、繋いだ生を幸せにしないと、その大切な祈りを自分で否定しちまう事になる」

「じゃあ、どうすれば良いのよ！」

癇癪を起こすように叫ぶマミの頭に手を乗せる。そのついでに荒ぶる感情の振幅を小さくして心を鎮めてやる。

今の悠はかなり外れている。少しくらいならこうやって無理矢理感情を押さえつける事も可能だ。

精神への干渉プロセスに言い様のない違和感を感じたが、とりあえずなだめて言う事を聞かせられる体勢には出来た。

「自分の為に祈った事を恥じるな。負い目から助けるなんざ見当違いも甚だしい」

「……」

視線が揺れて困惑している事が丸分かりだが、しかしもう彼女はこちらの言葉を否定してこない。

ようやく受け入れる素地が出来てきたという事だろう。

「同情とか、引け目とか、そういう気持ちで助けようなんて考えが最初から間違いなんだ。負は正（マイナスプラス）でしか打ち消せない。全員が得をする結末が一番良いに決まってる」

「でも、私は……！」

聞き分けのない子供の様に首を振るマミ。
いや、実際に子供なのだ。純粋だからこそ、こんなつまらない勘違いをして引け目を感じている。

「見返りを求めるのは人間として当たり前の心だ。誰かに認められたいって気持ちは誇るに値する。その気持ちが無いと、同じ様に他の誰かを認めてやれない」
「でも、誰に見返りを求めろって言うの！？　皆、魔女の事なんて知らないのに！　どれだけ頑張っても、誰も認めてなんかくれないのに……！」

また少し腹が立った。
この子供は今まで何を聞いていたのかと、思いっきりこの頭を叩いてやりたくなる。

「ちょ、痛い痛い痛い！」
「あ、すまん。つい」

うっかり頭の上に乗せていた手が彼女の頭を鷲掴みにしていた。
乱れた髪を手で直す彼女に、もう一度言って聞かせる。

「だから、俺が認めるって言ってるだろうが」
「え？」

まだ意味を理解できずに戸惑う様子を見せるマミ。
その頭の髪をわざと乱すように強くわしゃわしゃと撫でまくる。

「見返りが欲しいなら俺がやるよ。頑張ったんだなって認めてやるし、思いっきり褒めてやる。マミの良い所も悪い所も全部俺が肯定してやる」

呆けたような声を上げる彼女に、今度こそしっかりと受け止められるように言の葉を紡ぐ。
これ以上、彼女が間違えたままでいないようにするために。

「オマエの命は貴い。生きる事は、先があるという事自体がそれだけで奇跡の様なものなんだ。だから、これから人を助ける時には笑って行け。誰かを助けて、お前自身も笑って生きろ。その為なら、俺は幾らだって協力してやる」

そう言って嗤(わら)う。不幸を嘲笑い、幸福を笑って迎え、全てを容認して笑って見せる。
誰かを助けたいと思うのならば、こうやって笑ってやるべきだ。
尤も、悠は笑っているのではなく嗤っているため、その表情は悪意すら感じる様な歪な笑みになっているだろうが。

「……本当に？」

そして、マミは恐る恐る手を伸ばしながら、不安げな表情で尋ねてくる。
ようやく、彼女は年相応の素の表情を出してくれた。

「おう」

差し出された手を握り返す。
同時に、彼女の瞳から透明な雫が頬を伝って落ちていく。
そしてその顔には、ようやく見つけた安らぎへの子供らしい安堵の笑みが浮かんでいた。

「まあ、物はついでだ。暇潰しに魔女退治にも付き合ってやるよ」

「え！？」

そう告げた途端にマミは顔を青くして慌てだす。

そんな彼女の姿も、愉快（たいせつ）な思い出としてしっかりと記憶に残しておいた。

超番外編。Ｆａｔｅ／ｄｅａ ｅｘ ｍａｇｉｃａ（前書き）

――ＣＡＵＴＩＯＮ！！――
――ＣＡＵＴＩＯＮ！！――
――ＣＡＵＴＩＯＮ！！――

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ ｎｉｇｈｔの第五次聖杯戦争を舞台に、東方マギカ（東方ｐｒｏｊｅｃｔ・魔法少女まどか☆マギカ）、ＭＥＬＴＹＢＬＯＯＤＸ、Ｆａｔｅ／ｅｘｔｒａ、プリズマ☆イリヤ２ｗａｉ！！ ＡＡＴＭ～アーネンエルベの日常～のキャラクター達が乱入！？

完全なコメディです。

各作品のネタバレを大いに含みますので、ご注意下さい。

超番外編。 Fate／dea ex magica

それは、冬の古城の礼拝堂。
雪の様に神秘的な白い髪を長く伸ばした小さな少女が、降霊の儀を執り行なわんとしていた。
祭壇に置かれているのは、触媒として用意された黒き石塊。
かのギリシアの英雄を祀る神殿の礎たる岩石であり、これを触媒として用いる事で最強と謳われる英霊を手に入れる――――筈であった。

水銀で描かれた魔法陣が、少女の全身を覆う赤き刻印と呼応して発光する。

「――告げる。
汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば答えよ――」

朗々たる詠唱と共に、少女が持つ莫大な魔力ですら足りぬと召喚陣が少女の体を通して太源(マナ)をも取り込み始める。

「――誓いを此処に。我は常世全ての善と成る者、我は常世全ての悪を敷く者――」

本来聖杯によって行われる筈のサーヴァントの召喚を、聖杯戦争が開始される二ヶ月前のこの時に少女は実行していた。
自らの内より生じた訳ではない太源(マナ)は、通過点たる彼女の魔術回路を蹂躙する。
さらに、アインツベルンの裏技と大聖杯内部の魔力を使用する事による負荷がさらなる苦悶を生んだ。

その苦痛を彼女はただ一つの執念によって乗り越え、今やただ儀式を成し遂げるための部品（パーツ）と成り果てる。
その感情の名は復讐。自らを捨てた父に、その義息を殺す事で十年間蓄積された感情に決着を着け、そして一族の悲願にして正当な所有権を取り戻す。

触媒を用意した当主の誤算は三つ。
一つは彼の英霊が聖杯も闘争も求めてはいなかった事。
一つは儀を執り行う少女の感情を無視していた事。
そして一つは、用意した黒き石塊よりも少女自身の肉体が触媒として優先され、強い縁（えにし）が少女と呼び出される者の間に繋がっていた事。

「――汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」

聖杯の起動前に少女が召喚を可能とした最大の理由は、少女自身の肉体が小星杯という願望機である故に。
だからこそ、彼女は繋がったその瞬間に理解していた。
繋がった先が英霊の座とは異なる座標、最早根源の渦よりも更に高次の存在である事も。
目の前の存在が喚び出そうとした者とはかけ離れた異質である事も。
そして、これが自らとソレがお互いに引き合った結果である事も。
失われた魔力と体力に崩れ落ちるその体を、決して頑丈とは呼べない腕が支えたのを感じて少女の意識は闇へと落ちた。

とっさに受け止めた少女を見て、空色のTシャツに黒のスラックス姿の男――悠――は、自分の顔が愉悦の形に歪んでいることに気付かなかった。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、及びサーヴァント・アヴァター（悠）参戦決定。
チーム・無敵少女隊、結成。

「ええい、もう何だってのよ――――！」

聖杯戦争の地たる冬木の霊地を管理する魔術師、遠坂家。
その現当主たる遠坂凛は、前代未聞の失態に毒づきながらも壊れた居間のドアを蹴り開けた。
時計のズレによる予定外の事象。
地下に響き渡った上の屋敷からの轟音。
だが、間違いなく彼女は召喚にこれ以上無い手応えを感じていた。
運命とさえ呼べる程の縁を持って喚び出したサーヴァント。
最も遠坂凛にこそ相応しい相棒が蹴り飛ばした扉の先にいる。

「――よう、遠坂」
「なんでよ――――！？」

天井に大穴を空け、破片が飛び散って滅茶苦茶になった居間のソファーに座っていたのは、凛が気にかけている後輩の想い人にして学校の同級生、衛宮士郎だった。
ただし、黒いボディアーマーと赤いマントに身を包んだ姿で。

「で、死んだ後も人を救えると信じて英霊になったのはいいけれど、させられたのは喚び出された場所の人間の抹殺？　それで絶望して間違った理想を抱いた自分を殺そうとして？　その時も私のサーヴァントでアーチャーで？　しかも人間の衛宮君に負けて、最後には理想を取り戻して座に還ったら知らない女の子が待ってて、気が付いたら若返ってた？　なによそれ！？　意味分からない！！」
「そう言われても、俺にもよく分からないんだよ。あ、これ返しとく。助けてくれてありがとう、遠坂」
「ああ、うん。確かに父さんの形見の宝石ね。……って何でまだ持ってんのよ！？　マスターだった平行世界の私に返したんじゃなかったの！？」
「ああ、座に固定されたら装備は増える事はあっても減らないからな」
「いや、減らないのはともかく増えもしないでしょ、普通。しかも何よその女の子って。座に固定された英霊を改竄したってことよね、それ。……そいつ、根源に到達したって事？　というか、そもそも衛宮君が魔術師だったなんて今初めて知ったわよ！？」

がーっ、と咆哮する赤い悪魔。士郎は反射的に赤いマントを捲し上げて対ガンド防御体勢を取る。

「いや、この時代の俺は半人前未満の魔術師だったから。遠坂に教

えてもらって初めて魔術回路のオンオフのやり方を知ったし」
「……は？」
そのあまりと言えばあまりなカミングアウトにポカンとする凛。
「ちょ、ちょっと待って。じゃあ、衛宮君魔術師じゃないの？」
「そうでもない。魔術を使う度に魔術回路を作ってたから、一応魔術は使えたぞ」
「――――待ちなさい。それ、ちょっとでもミスったら死ぬじゃないの」
「ああ。おまけに使える魔術も強化と投影だけだったしな」
頭を抱える凛にため息をつく士郎。
それがどれほど馬鹿げた行為であるか判っているからこそ空気が重い。
「……で、なんで聖杯戦争なんかに参加するのよ。聖杯に委ねる願いが有るわけでもなし、もう自分殺しも諦めたんでしょう？」
「そりゃあ、遠坂が喚んだからだよ。遠坂に喚ばれたなら来るしかないだろ？」
「は、はあああああ！？」
率直に答えると、凛は顔を耳まで真っ赤に染める。
そしてしばらく頭を振ると、彼女はしばらく息を整えてから口を開いた。
「で、今のあんたは聖杯戦争の前まで体を戻されちゃったの？」
「いや、多分この町を出て行く前ぐらいだと思う。魔術回路は全部起動するし、魔術もちゃんと使えそうだ」
「そいつ、あんたを助けに来たって事？」

「みたいだな。正直会った憶えは無いんだけど。なんか絶望の因果は全て私が受け止めるって言って、気が付いたらこうなってた」

頭痛がするのか頭に片手を当てて考え込む凛。

しばらく考え込んだ後で、睨み付ける様にこちらを鋭い眼光で射抜く。

「で、あんたはこの世界の衛宮君をどうするの？」

「俺はサーヴァントだからな。マスターの指示に従うよ」

ほら、と凛の令呪を指差す。

同時にきちんと両者の間を魔力が循環し始めた。

「待って。あんたはそれでいいの？」

「……良くない。でも、この世界の俺は遠坂に任せる。このまま聖杯戦争なんて物に関わらずにいけば一般人として誰かを助けるために生きるだろうし、俺と同じやり方じゃなくても誰かを助けることは出来るんだ。でも、俺はセイバーをもう王としての責務から解放してやりたい。間違ってなんかいなかったのに、やり直しを求め続けるなんてあんまりだ」

「そう。なら、決まりね。私は衛宮君にセイバーを召喚させて、それを私達が聖杯戦争に利用する。その間にセイバーの説得は任せるわ」

「……遠坂？」

目を丸くする士郎に、若干頬を染めながらも凛はそっぽを向く。

「聖杯が汚染されているのが判った以上、遠坂の当主として放置は出来ない。セイバーが私達と組んだなら、他のマスターに壊れた聖杯を渡さずに済むでしょう？」

「――ああ。ありがとう、遠坂」

率直な礼を言われて凛はさらに恥ずかしげに頬を掻く。

そして小さな声でぼそりと呟いた。

「凛」

「え？」

「名前、もしくはマスターって呼びなさい。あんたは私の物（サーヴァント）なんだから。いいわね、アーチャー？」

「――了解した。これからよろしくな、凛」

名前を呼んで手を差し出す。凛がそれを握り返し、ここにまた聖杯戦争へと臨む一組の主従が誕生した。

「あ、それと俺のクラスはキャスターだから」

「えええええ！？」

遠坂凛、及びサーヴァント・キャスター（エミヤ）、参戦決定。

チーム・赤い悪魔と苦労人、結成。

間桐家の地下には蟲蔵と呼ばれる部屋がある。
使い魔として使役される蟲達の、文字通りの穴蔵である。
代々の間桐――いや、マキリの魔術師達がこの場でマキリ・ゾォルゲンに甚振られ、駒として成長し、そして新たなる贄を産んで死んでいった。
そして今、間桐桜の手によって、この場でサーヴァントの召喚が行なわれる。
尤も、ゾォルゲンにとって桜は次の代の魔術師の母体であり、このイレギュラーに勃発した聖杯戦争で使い潰すべき駒ではない。
故に、ゾォルゲンは桜にサーヴァントの召喚のみを行なわせ、マスターの代役としてその兄を利用する積もりであった。

しかし、桜が喚び出した者は英霊などではなかった。
サーヴァントは召喚者に性質が似た存在が喚び出される。
いずれ魔と成り果てる身である忌まわしき身ゆえに、喚び出される存在もまた同様に最後には魔に堕ちてしまう運命を背負っている。
かくしてその者は桜の性質に呼応して現れた。
神々しいまでの白い衣を身に纏った、桜色の髪の少女。
希望より生まれ、絶望と共に魔女へと堕ちる存在。
魔法少女。
それも、最強の魔法少女にして最悪の魔女に成るとさえ言わしめた存在だ。
その彼女が苦悩と煩悶の果てに辿り着いた答え、その一欠片を桜は喚び寄せた。

召喚された少女は、目の前の少女にそっと手をかざす。

「もう、絶望なんてしなくていいんだよ。全ての因果は私が受け止める。希望を持つことが間違いだって言うのなら、それは違うって何度でも言い続けるから。だから――」

笑って、と自分よりも幼い少女に語りかけられた桜の心境はどのような物だったのか。

彼女に理解出来た事はただ一つ。

忌み嫌ってきた、救われない筈の自分を目の前の少女が終わらせてくれるという事だけだ。

そして、奇跡は成った。

少女の手に触れられた瞬間、桜の体に深く根付いた刻印虫達が一瞬にして浄化されたのだ。

一切の痛みも後遺症も残す事無く、桜の内の穢れの象徴が全て消え失せ、残されたのは人間としての身体のみ。

そして、暗い、冥(くら)い蟲蔵に桜色の光が溢れていく。

光の奔流の後に残されたのはただの地下室だけだ。

忌まわしき蟲達も、それらを統率し召喚を見守っていたゾォルゲンも、その魂の器である桜の心臓に寄生していた本体の蟲も、そしてこの部屋に染み付いた嘆く魂の欠片達と数多の負の念も、喰い荒らされ部屋に染み付いた死者の一部でさえ、その一切が浄化されたのだ。

もはや彼女を縛っていた物は、内にも外にも存在しない。

その一切が鬱屈し積み重なっていた負の情念ごと全て消え去ってしまった。

だが、これは少女にとって救いなのだろうか。

これまでとこれからの全てを諦めていた彼女にとって、この事態はいきなり一面の草原に投げ出されたようなものだ。
ただ道具として使われるだけの日々が終わっても、桜には何の指針も目標も無い。
そこで、桜は自分に手を差し伸べる少女の手を取った。
それまでただひたすら押し殺していた恋慕が、抑圧の原因の消滅と共に堰を越える。
この殺し合いを乗り越え、自分を救おうとした少女に聖杯を手にしてもらい、そして全てに清算をつけることで、桜は自身の心と向かい合うことを決意した。

「あ、あれ？　帰れない……？　あ、あの、ここ、何処ですか？」

なぜか、自分よりも目の前にいる少女もまた迷子になってしまったらしい。
何もかもがおかしくなって、小さく噴き出す。
先の分からぬ迷子同士、手探りで一緒に道を探していくのも良いだろう。

「私、間桐桜です。これからよろしくお願いします」
「へ、あ、はい。私、まどか。鹿目まどかです。よろしくお願いします」

間桐桜、及びサーヴァント・セイヴァー（鹿目まどか）、参戦決定。
チーム・ＭＭＧ（まどかさんマジゴッド）、結成。

魔術協会に寄付された旧エーデルフェルト邸。その二階で、男装の麗人がソファーに寝転んでいた。
彼女の名は、バゼット・フラガ・マクレミッツ。
魔術協会から派遣された聖杯戦争の参加者。
封印指定の執行者という魔術師の中でも戦闘に特化した存在であり、上からの命令でこの儀式に参加させられた。
敗北は許されず、勝利したところで何の栄誉も与えられない。
されど協会として放置する事も出来ない儀式に、彼女は厄介払いのごとく送り込まれた。
しかし、彼女自身の参加理由は、今回の聖杯戦争の監視役たる言峰綺礼に推薦された事が大きな比重を占めている。
正史と呼ばれるほぼ全ての平行世界において共通である歴史において、彼女は家に伝わる遺物、幼い頃より憧れていた故郷の英雄の刻んだオリジナル・ルーンを触媒に用い、そしてその願いは果たされる事となる。
だが、この世界の召喚において、その結果は彼女の望みを大きく裏切った。
この世界を運営する因果は、二ヶ月前から本来の流れから大きく変化し続けており、しかもその事を知る者は極一部の超越者のみである。
だからこそ、大聖杯による召喚は英霊の座に繋がる事は無く、彼女だけの聖杯へと到達する。

召喚の終了と同時に気を失っていた彼女は、カチカチとピースを動かすパズルの音を聞きながら朦朧とする意識を浮上させた。
同時にイスに座ってパズルを弄っていた、やや黒い肌に漆黒の紋様を全身に刻んだ少年が振り向き、バゼットの顔を見るや否や口元を笑みと呼ばれるカタチに歪ませる。

「よう、目が覚めたかマスター」

少年のかけて来た声の気安さを疑問に思う。
その声にはまるで長い間共にいたかの様な深い親愛が込められていた。

「さあ、聖杯戦争を続けようぜ」
「……は？」

その少年――おそらくはバゼットの喚び出したサーヴァント――は、そんな意味の判らない言葉を口にした。

「待ちなさい。まだ全てのサーヴァントが揃っていない以上、聖杯戦争は始まってすらいない。それを続けよう、とはどういう意味だ」

その当然の疑問を口にした途端、サーヴァントは腹を抱えて嗤(わら)い声を上げた。

「ク、ハ、ハハッ、アハハハハハハハ！！」

狂喜と憎しみに満ちた声に思わず立ち上がり、即座に戦闘体勢に

入る。
マスターとサーヴァントはあくまで利害の一致による共闘関係に過ぎない。
だが、目の前の存在は異常だ。
マスターがいなければ存在を保てないにも関わらず、保身を考える事無く主を喰い殺そうとする狂犬そのもの。

だが、部屋に満ちた悪意の奔流は唐突に消え失せる。
見れば、目の前のサーヴァントはあまりにも愉快そうな笑みを浮かべていた。

「ああ。どうやったかは知らないが、とにかくアンタはこの時点でこうなったオレを手に入れた。これで、アンタには生き残るチャンスが与えられたって訳だ」
「生き残る、チャンス……？」

目の前のサーヴァントの言葉は相変わらず意味が判らない。
彼だけが知っている事実を、彼女は全く知らないのだから話がかみ合わないのは当然の事だ。
だが、今の言葉を額面通りに受け取るのならば、それではまるで――――

「ああ、その通り。アンタはこの後死ぬんだよ。言峰綺礼に不意打ちされて、ランサーの令呪をその左腕ごと奪われて、な」

ケラケラと嗤う目の前のモノの言葉に思考が停止する。
何を言っているのか判らない。いや、そもそも理解しようと脳髄が働かない。
あの男は、彼女を評価してくれたからこそ彼女を指名したのではなかったのか――？

「ん、どうした。いきなり死亡宣告は不評か？　だが、知ってしまえば後は早い。アンタは下手なサーヴァントより強いんだ。不意討ちだって知ってさえいれば、あのバカ神父ぐらい返り討ちに――」
「待ちなさい。貴方は何だ。私のサーヴァントではないのか？」
「いや、間違いなくオレはアンタの喚び出したサーヴァントだよ。しかも、イレギュラー中のイレギュラー。聖杯戦争が終わって半年後のサーヴァントを喚び出すなんざ、今度はどんな失敗（ポカ）をしたんだよ」

その言葉に驚愕すると共に理解する。
このサーヴァントは聖杯戦争が終わった後で自分を喚び出したと言った。ならば、このサーヴァントは聖杯戦争の顛末を知っている事になる。

「いいでしょう。とりあえず洗いざらい吐きなさい。特に、あなたの知る聖杯戦争についての全てを」
「げ。聞かれない事は黙っておくのが悪魔の条理だってのに。全部話せとかルール違反じゃね？」
「ほう、それは良い事を聞いた。ならば暴力に訴えてでも、全てを喋らせて上げましょう」
「ま、いいか。せっかくの新しい展開なんだし。楽しく行かなきゃもったいない」

そう言って、首を掴み上げられたサーヴァントはその笑みを崩さなかった。

そして、アヴェンジャーとして死にかけのバゼットと契約したと語ったそのサーヴァントは、聞かれてもいないような事まで始終ニヤニヤと嗤いながら生き生きした様子で話し続けた。

「で、どうするよマスター。あの神父には最悪のサーヴァントが付いている。こっちから行ったんじゃ、返り討ちに遭うだけだぜ？」

「問題ありません。あなたの言った通り、あの男が単独で不意討ちに来るのならどうにでもなる。彼の英雄王も、アーチャーとの相性は最悪なのでしょう？　その二つをぶつけて消耗した隙を突き、生き残った方を潰せばいい」

「オーケー、上出来だ。……ったく、きっちり覚悟を固めちまえばそうやって上手く出来るのに、どうしてそんなに自分を認めてやれないのかねえ」

そう言って本気で呆れながらため息をつくサーヴァント。

そのあまりの言い草に、彼女がずっと抱いていた疑問がふと口から零れ落ちる。

「何故、私なのですか？」

「ん？」

「私と貴方が契約に至る経緯は理解した。だけど、それならば敗退して瀕死のマスターであったなら私でなくとも良かったでしょう。例えば、貴方を求め続けていた言峰の方が私よりずっと相応しい。……その、何故、貴方は何の取り柄もない私を選んだのですか？」

それを聞いて、きょとんとするサーヴァント。

だがその顔に真剣さが宿るのを見て、言葉の一つも取り零さない様神経をただ聞く事に集中させる。

「そこがいいんだよ。オレが好きになったのは、アンタのそういう弱さなんだ」
「弱さ、ですか？」

かけられた言葉を繰り返すように問い返す。
サーヴァントは、見た目通りの少年のような笑顔で頷きそれを肯定した。

「ああ。生存に疑問を持つなんざ、人間以前に生命として致命的過ぎる欠陥だろう？　そんなアンタは自分の事が嫌いで、好きになれなくて、どれだけの成果を出しても自分を認めてやれなかった。だが、それでもより良い自分になろうと足掻いてきたんだ。オレはさ、どれ程無様でも、結果に残らなくても、そうやって自分の為に進むヤツが好きなんだよ」
「――――それは、誰かの為ではなく？」
「はっ、そういうのは心の贅肉を持ったヤツがやりたい様にやればいい。アンタは自分の事だけでもう手一杯だって事を自覚するべきだ」

その言葉に胸が詰まる。
目の前の存在は誰からも否定されるべき絶対悪でありながら、こうして彼女を選び、認め、支えようとしてくれている。
いや、彼の話が全て事実であるのなら、彼は今も自分の夢を終わらせてまで、彼女を助けようと足掻き続けている事になる。

「――そうだ。私が貴方を喚び出したのなら、貴方と共にいた私はどうなったのですか？」
「さあな。オレは願いを叶える悪魔になったサーヴァントの複製品だからな。コピー元がこの後どうなるかなんて知らねえよ」

「コピー……ですか？」
「ああ。尤も、何らかの形で終わりを迎えるだろうがな。始まりがある以上終わりも存在する。永遠に続くものなんざない。いつかは契約も切れて、あっちのバゼットも無事目を覚ますだろう」
「そう、ですか……」

その言葉に、少し悲しくなる。
せめて、出来るだけ長く続いて欲しい。
本来与えられる筈だった日常を、奪われ続けた人並みの幸せを、少しでも彼に与えたい。

「ところで、だ。どうせならきっちり契約しないか？」
「――え？」

令呪はある。パスも繋がっている。既にサーヴァントの契約はこうして成立している。
だからこそ、彼の言葉の意味が判らなかった。

「オレは聖杯のサーヴァント。クラス名へブンズフォール。この地の願望機（せいはい）は莫大な魔力で願いを広義的に解釈して叶える紛い物だが、オレは許された範囲で願いを叶える小さくても本物の聖杯だ。さあ、オレと契約するのなら――――契約が続く限り、その願いを叶えてやる」

そう言って、彼は手を差し出した。
成る程、彼は“今は”人間の願いを叶える悪魔だ。
悪魔らしく甘言も上手い。
尤も、話を聞く限りでは、誰よりも信用できるくせに最高の形で裏切る存在でもあるが。

「願いを曲解したりしませんね？」
「疑り深いなー。まあ、いいぜ。約束してやるよ」
では、と差し出された彼の手を握り――――
「貴方自身の願いが実現されて欲しい」
「なっ――！？」

――――そう、心からの願いを口にした。

バゼット・フラガ・マクレミッツ、及びサーヴァント・ヘブンズフォール（アンリマユ）、参戦決定。
チーム・封印執行・複製駄犬、結成。

同時刻。冬木教会近くの墓地にて、人外同士が戦いを繰り広げていた。
虚空に開いた異空間への門。
空間の揺らぎの向こうから現れ次々に射出されていくのは、その全てが伝説に謳われる武具の原点。
一つ一つに込められた神秘は想像を絶する力を秘めている。
その内の一つでも地を穿てば、そこにはクレーターが出来るほどの破壊がもたらされるだろう。
真名を開放せずとも、投擲するだけでそれほどの威力を持つそれらが間断無く放たれる攻撃を絨毯爆撃に例えるならば、五階建てのビルをも越える巨体を持って生身でそれらを弾き返すその存在は映画に出てくる怪獣であろうか。

「王を見下ろすか、雑種！」
『――聞き分けがないのね。私の方が億単位で古く純粋な存在なのだけど』

黄金の鎧に身を包み、赤い瞳に激怒を宿す世界最古の英雄ギルガメッシュ。
対するは肉体のみならず衣服まで同時に巨大化した銀の髪を背で三つ編みにしている女性。
上下左右で対比的に赤と青で彩られた独特な服は、叩きつけられる宝具に穴どころか綻び一つ出来る様子は無い。
逆に巨人が手を一振りするだけで、魔力とは違う神秘の力で構築された巨大な光球が無数に放たれる。
それらは宝具の群れを破壊出来ないまでも、遥か彼方に吹き飛ばす。
しかし、光球の破裂する轟音も、あまりにも巨大な女性の姿も墓地の外には漏れることは無い。

だが、恐るべきはそれを為している物が魔術による結界ではない事だろう。
その戦いを墓地の端で傍観する一団の一人、白い服に紫のスカートという服装の金の髪を持つ女性が行なうそれは、世界そのものに意志を接続して自然を自身の一部として操り、この墓地一帯を己の世界へと変えているのだ。
「空想具現化（マーブルファンタズム）……。まさか……真祖の、ひめ、と、は……」
「あらあら、すごいですねー。まさかあの薬でまだ意識を保っていられるなんて。と言っても、もう限界の様ですが」
「必要な情報はエーテライトで抜き出しました。ですが、この男はこの場で処分した方がいいでしょう。この男は人間としての在り方が破綻している。世界すらも己の疑問の為に使い捨てるなど許容出来ない」
「確かにあの地下室は最悪だった。とはいえ、堕ちたとしてもかつては同じ教義を胸に抱いた身。せめて我が御使いの杭を以って貫こう」
「やめておきなさい、聖盾の騎士。現在貴方は殉教者として扱われている身です。いかに再構築された存在とはいえ、貴方が手を下した事が知られればシオンや弓塚さんにも迷惑がかかりますよ」
「あ、心配してくれてありがとうございます。シエル先輩」
「んー。じゃ、私が殺ろっか？」
「やめなさいよブルー。埋葬機関のでか尻シエルならともかく、あなたが殺ったらそれこそ大問題じゃない。このお祭、一応は第三の儀式でしょ？」
「誰がでか尻ですか！　このあーぱー吸血鬼！」
「いえいえ、ここは予定通りアンバー印のお薬で洗脳しちゃいましょう。儀式としてはともかく、バトルロイヤルの破綻は確定ですし」
「あれ？　コハクがここに来てたら志貴や妹達の食事はどうするの？」

「問題ありません、真祖の姫。オシリス改を改修して作った、家事やスケジュール管理用プログラムをインストールしたヒューマノイドを用意しました。彼女――オシリス壊（かい）ならば、ドクターには及ばないまでも、料理程度の家事など朝飯前です」
「シ、シオン！　その名前、危ないフラグ建ってない！？」

地に倒れ伏し意識を失った神父と、真祖と呼ばれた女性。
それ以外の者達は姿を隠すように黒いローブに身を包んでいるが、その全てが女性だ。
尤も、殆どの者が裏では名が知られ過ぎた存在ばかりではあるため、こうして身を隠すのも仕方がないのだが。

「あ、そろそろ決着が着くみたいよー」

真祖と呼ばれた女性が上げた暢気そうな声に、その場にいた全員の意識が戦場に向く。
次の瞬間――――

「天地乖離（エヌマ・エリシュ）す開闢の星！」
『神符「天人の系譜」』

ギルガメッシュの一振りと共に放たれた擬似的な空間断層は、相対する無数のレーザーを切り裂いて巨人の腹部を両断する。

「はっ！　世界を切り裂いた真実に雑種ごときでは耐えられまい！」

そしてギルガメッシュは巨人から噴き出す血を見て、勝利を確信した凄絶な笑みを浮かべ――

「――な！？」

――突如復活した、切り裂かれた筈のレーザーに呑み込まれた。
だが、これは巨人にとって予定調和の出来事である。
このレーザーは無限に新生を続ける事で減衰する事無く無限遠に到達する光だ。
例え切り裂かれたとしても、その瞬間に新たな光として生まれ変わり、消滅した地点から再び直進する。
これを防ぐには、光を捻じ曲げるか防御する事で熱エネルギーとして処理しなければならない。
とはいえ、ギルガメッシュの纏う黄金の鎧も宝具級の武装である。
ほぼ威力を打ち消された光が消え去った後に彼の視界に映ったのは、横に両断した筈の巨人が傷一つ無い姿で己に拳を振り下ろす姿だった。

「がっ――――――！」

轟音と共に大地が揺れる。
とっさに構えた筒の様な剣はその攻撃に折れる事は無いものの、それを支えるギルガメッシュの身体はその衝撃を受け止めきれない。
鎧に覆われた四肢から血が滴り、彼自身もよろめき体勢を崩す。
鎧はその硬さのみならず内包する神秘によって装着者を守るが、それでも巨人の一撃は到底防ぎきれるものではない。
満足に動けない彼は即座に地面ごと蹴り飛ばされて宙を舞う。
そして倒れ伏した彼が最後に見た物は、己を踏み潰す巨人の足であった。

「あーあ、あっけない」
「いえ、今の彼女を一回とはいえ殺しただけでも充分な偉業です。流石は彼の英雄王と言ったところでしょう」
『マスター、もういいかしら？』

「はーい！　アンチまききゅーＥＸこと『となみんΣ（シグマ）』、いっけーー！」

巨人の女性に向けて黒フードの女性が錠剤――ただし、大きさはバスケットボール大――を投げ、それは巨人の手の平に落ちる。
巨人がそれを飲み込んできっかり十秒、あっという間に巨人の身体が身に纏った衣服ごと縮み、普通の人間の大きさになる。
いや、この場合は戻ったという表現が正しいか。

「流石ね。存在を拡大するなんて、私には思いつかなかった」
「いえいえ。永琳さんがいなければ、存在の誇張なんて出来ませんでしたよ。おかげでまききゅーＸの完全解析も出来ましたし」

先程マスターと呼ばれた竹箒を持つ黒フードの女性と、永琳と呼ばれた先程巨大化していた女性がにこやかに握手を交わす。

「存在の誇張による概念の2ランクアップ。代行者の防御魔術を宝具さえ上回る幻想に仕立て上げる。これで宝具の強化が出来れば最強だったのでしょうが……」
「そこまでいけばもう宝具そのものです。元からそのような薬を所持していたならともかく、あくまでスキル『製薬』は現地調達の材料を用いるものですし」
「んー、それ以前の問題じゃない？　この世界にいる限り、身体そのものが破格の神秘だもの。一億年以上生き続けてる身体とか、無限の蘇生とか。もう竜なんて目じゃないぐらいの幻想よ？」
「それはこの世界のルールでしょう？　幻想郷では不老不死ぐらいじゃ驚かれないわ。それより、これからの事なのだけど」
「はい。これで正式なサーヴァントの魂が小聖杯に吸収されました。今回召喚されるサーヴァントの殆どが英霊の座から呼ばれない以上、第四次を生き残ったサーヴァントを贄に奉げるのが最適です。まし

て、彼の魂は通常のサーヴァント三騎分に相当する。ただ、ドクターの会った人物の話がどこまで信用できるのか……」
「あ、それは大丈夫だと思いますよ。あの人、私とよく似ていますから。ふざけてはいましたけど話自体は事実です。それに、志貴さんの貧血を治していただいた以上、永琳さんにこの借りはお返ししませんと」
「まあ、あの程度なら感謝される程の事ではないわ。私には、あの異変の真の元凶がこの世界にいるという事の方が重要だし。むしろ、これだけの戦力でも対抗できるかどうかが問題ね」
「あの、他のサーヴァントさんに協力してもらえばいいんじゃないですか？　全員特別な存在なんでしょう？」
「さつきの言うとおりです。彼女とドクターの協力によって志貴の治療という目的は既に達成し、その上真祖の姫の吸血衝動の封印まで出来た。私達には第三法を求める必要もない。いえ、むしろ下手に手を出せば抑止力が発動する。二人の作った薬による洗脳とエーテライトによる思考誘導によってこの神父を利用すれば、充分に可能です」
「シオンが言うなら大丈夫だろう。それより、地下の子供達は本当に助けられるのか？」
「ええ。辛うじて生は保たれている。あれなら充分処置が可能だわ。そうね、三日もあれば充分よ」
「よろしくお願いします、永琳さん。ああいうの、ちょーーっと思うところがないでもないですし」

そして彼女達は墓地を去り、教会へと向かった。神父の足を持って引きずりながら。
なお、この墓地での一件は言峰綺礼の手により聖杯戦争の一環として扱われ、秘密裏に処理される事となる。

言峰綺礼、敗退。及びサーヴァント・アーチャー（ギルガメッシュ）死亡。

琥珀（マスター）、シオン・エルトナム・アトラシア、弓塚さつき、リーズバイフェ・ストリンドヴァリ、アルクェイド・ブリュンスタッド、シエル、蒼崎青子、及びサーヴァント・ファーマシー（八意永琳）、参戦決定。

チーム・路地裏ピラミッドＥＸ、結成。

さらに柳洞寺地下、大空洞にて。

「あの、アンバーさん。本当に大丈夫なの？」

「はい、勿論です！　暇をつぶしてさしあげようとして、結局貴女方に迷惑をかけてしまいましたからねー。というのは建前で、最終的に面白い事になるのは確かですし！」

「まあ、クロがちゃんとした人間になれるなら私に文句はないけど」

箒を持った割烹着と巫女服を合わせたようなデザインの女性と、まだ小学生程度の薄い色素の髪の少女が空洞の中央にある巨大な台座の上で会話していた。
ただし、少女の姿も普通では無い。
ピンクを基調としたドレス染みた服装と、手にした円に五亡星を収めたステッキを持った姿はまさしく、娯楽作品で使い古された魔法少女そのものだった。
だが、その手に持ったステッキが独りでに少女の手から離れて浮き上がり、あまつさえ柄をくねらせ声を発する。

『いえいえイリヤさん！　成功すればクロさんからアーチャーのカードを抜き取っても問題なくなりますし、その過程まで楽しめるとあってはこれはもうやるしかないですよー！』
「いや、ルビーが楽しいなんて言う状況は出来れば勘弁して欲しいんだけど」
『んー、でもしっちゃかめっちゃかな舞台にしないと、この世界のバゼットさんと真剣（ガチ）な殺し合いをする羽目になりますよ？』
「ぜひ楽しい方面で！！」

少女の叫びには、悲痛なまでに切実な願いが込められていた。
そんな二人（？）の会話に箒を持つ少女が小さく微笑む。

『あ、ところでイリヤさん。転身は決して解かないでくださいね？
いまや例の人のせいでこの世界は特異点（ターミナル）となっていますが、本来は第二魔法の使い手でないと同じ人間が複数存在する事を世界は認めませんから』
「あ、うん。でも、この世界の私はクロがそのまま育っていたらっていうＩＦの存在じゃなかった？」
『はい。そのクロさんもサーヴァントとして喚ばれる分には問題は

ありませんが、やっぱり存在としてはどんなに違った経緯を辿ってもイリヤさんはイリヤさんなんです。要は世界の方がどう認識するか、なんですよー』

「あ、出来ましたー」

ルビーと呼ばれたステッキとイリヤと呼ばれた少女が会話している間に、箒を持った女性は地面に白いチョークであまりにも不可解な文様を描いていた。

その紋様はもはや子供の落書きの様で、波打つ円に規則性の無い文字らしき物が幾つか散りばめられている。その周囲を、デフォルメされたトカゲの様な落書きが四匹なぜかその周りを動き回っていた。

その中央には、毒々しい色のきのこに小さな手足が生え木槌を持つ人形が鎮座しており、さらにはメイドロボのミニチュアと青い作務衣、巨大な旧式プリンタと斬撃皇帝騎士団と書かれたプレートが四方を取り囲んでいる。

「さあ、これで根源よりなお上位に在る神の力を借りる準備は完了です！」

「よく分かんないけど、これで呪文を唱えればいいの？」

『はい！　魔力は私が無制限供給しますので、なんの躊躇いもなくやっちゃってください！』

ステッキが少女の手に戻り、少女はそのステッキを真っ直ぐ魔法陣に向け、集中のために目を閉じる。

「告げる！　汝の身は我に！　汝の剣は我が手に！　聖杯の寄る辺に従いこの意この理に従うならば応えよ！　誓いは此処に！　我は常世全ての善と成る者！　我は常世全ての悪を敷く者――――！」

莫大な魔力が紋様に集中し、その描かれた台座たる祭壇と異なる世への干渉を始める。
きのこの目が輝き、作務衣はいつの間にかメイドロボに纏わり付き、メイドロボは自分の人差し指を咥え始め、プリンタは轟音を上げて故障して、プレートには没という赤い字が浮き上がる。
もはや、この場で行なわれているのは魔術などではない。
人類がいかなる手段をとろうとも辿り着けないという意味においてはまさに魔法の域である。
尤も、イカれきっているという意味で人知をも超越してしまい、全ての秩序から逸脱する物でもあったが。
しかしその混沌は、大聖杯に刻まれたルールを上書きしつつ、いかなる奇跡をも容認する異界を形成する。

「汝三大の言霊を纏う七天！　我らが現世（うつしよ）より来たれ！　弓兵たる写し身よ！」

突如暗転。一切の光が無くなったその空間に、ただ一つの光が生まれる。
光源は先程のきのこ。その光はやがて存在感を神々しいまでに引き上げていき――

「でちゅうううううーーーー！」

――謎の叫びを上げて消滅した。
緑に輝く紋様の上には既に先程の謎のオブジェ達が姿を消し、そこに臣下の礼をとるような形で一人の少女がうずくまっていた。
少女が顔を上げ、真っ直ぐに背筋を正して立ち上がる。
その少女は、ステッキを持つ少女と瓜二つの姿形をしていた。
違いは新しく現れた少女の肌が若干浅黒い事と、現代ではありふれた洋服を着ている事だろう。

『成功ですイリヤさん！』
「クロ、どう！？　調子悪いところは無い！？」
「――ええ。むしろ良すぎて困るぐらいだわ。大聖杯によるバックアップのおかげで存在はほぼ安定。加えてイリヤからの無尽蔵の魔力供給。今ならアーチャーの宝具も展開可能だわ」

クロと呼ばれた少女はそう言ってから辺りを見回す。

「それにしても――ここが大聖杯？　知識としては知っていたけど、此処までおぞましい存在だったなんて」
「うーん、でもしょうがないのかも。ほら、ママが言ってたじゃない。聖杯は既に汚染されているって」
「私秘蔵のお守りこと『お部屋をお連れします』まで使いましたからね。これで他の世界から来た皆さんが死んでも元の世界のあの世行きです」
「死人の要らない聖杯戦争、か。そんな事原理的に在り得ない筈なんだけど、今や此処は根源の外にある世界まで重なってる。第三魔法（ヘブンズフィール）どころか第六すら成立しても不思議はない――――の？」
『いえ、そもそも根源の渦の外から介入があったからこそ、こうして奇跡のチャンスを手にした訳なんですけどね』
「難しい話はそこまでです！　目標は死傷者ゼロ人犠牲者一万人！　ワンダーフェスティバルナイトメアの始まりです！」
『イエーイ！！』
「「犠牲者出さないでよ！」」

箒を持つ女性とステッキの台詞に双子のような二人の少女が同時に突っ込む。
こうして、七人目のサーヴァントが召喚された。
ここから、異常しかない聖杯戦争の名を騙った喜劇が幕を開ける。

プリズマイリヤ（イリヤスフィール・フォン・アインツベルン）、マジカルルビー、超銀河系天才魔法少女マジカルアンバー、及びサーヴァント・アーチャー（クロエ・フォン・アインツベルン）、参戦決定。
チーム・カレイドライナーズ、結成。

果たして、彼ら（の良識、人権、尊厳、財産）は無事にこの最悪の遊戯を乗り越え、それぞれの願いを遂げられるのか。
今、如何なる平行世界においても存在しない運命（ちゃばんげき）の夜が幕を開ける。

『Ｆａｔｅ／ｄｅａ　ｅｘ　ｍａｇｉｃａ　――魔法仕掛けの神――』

続きは未定です。

――――Ｖｉｅｗｐｏｉｎｔ　ｏｆ　？？？――――

「ご主人様、起きてください～～」
「そうだ、奏者よ。早く目を覚まさねば余は泣くぞ？」

聞き慣れた声に意識が浮上する。
目蓋を開き、共にあの戦争を駆け抜けた最愛にして最高の自ら(サーヴ)の半身(アント)が二人、こちらの顔を覗き込んでいた。
そう、二人。
記憶にある聖杯戦争では一人のマスターに一人のサーヴァントが原則である。
実際に自分は一人のサーヴァントと心を通わせ、自身の願いを聖杯に入力して消滅する――――筈だった。
だが、自分はこうして此処に存在し、記憶には二つの歴史が等価値に存在していた。
赤いドレスに身を包むセイバー。
狐の耳と一尾を持つキャスター。

「ふん、まさか同じ願いを持つ者がおるとは思わなかったわ。だい

たい、何故貴様のような駄狐が我が奏者を誑かしておる」
「こっちの台詞ですこの暴君女！　ご主人様は私の旦那様なんですから！　新妻枠は私のもんです！」
「む、こやつは余の婿ぞ！　共に愛を誓った事実は覆せぬわ！」

二人の間に火花が散る錯覚を覚える。
月の聖杯（ムーンセル）に願いを書き加えた後、自分は最後を迎える事はなかった。
ただ一人生き残ったイレギュラーたる彼女へメールを送った後、もう一つ願いを書き加えたのだ。
果たしてそれは叶えられた。
書き加えた命令はただ一つ。

『最後まで共に在ってくれた彼女（サーヴァント）に願いを叶える権利を与える事』

その願いの結果がここにある。
願いを叶える権利を得た彼女達は、地球にて自分と共に在る事を望んだ。
そして無数の未来から一つの形が観測される。
魂の入っていない空（から）の器が生まれ、その中に聖杯の中で消去される前に自分という霊子（たましい）データを転送し、その傍らに彼女達を受肉させて移動させる。
しかし、星はその事を容認しなかった。
当然だ。空（から）とはすなわち「（から）」であり、また彼女達はムーンセルの記録データから生み出された存在であって地球という星から生まれていない。
世界はその両方の消去を望み、しかし聖杯は二人が共に在るという願いの実現の為にそうならない未来を用意した。
二人が共に在る事を可能とする無数の未来。
その内の一つが偶然（ひつぜん）の結果、異なる時間軸、異なる地球へと移動

する事で星の消去対象から逃れる事であった。
ここにいる自分はそうして飛ばされた結果、異なる運命(サーヴァント)を持つ二人の自分が衝突(コンフリクト)、融合(フュージョン)した結果生まれた存在である。
異なる歴史は損なわれる事なく融和した。その結果、異なる二つの世界の「(から)」に繋がることで自分は完全に安定した。
問題があるとすれば、セイバーとキャスターに折り合いを着けてもらわないといけない事だろう。
二人の願いは同じ。自分と共に在る事。
故に二人は自分が在る限り在り続け、逆に二つのムーンセルによって支えられる自分は二人と完全に同時に消去されない限り生き続ける未来が保障されている。
幸い、この大源の魔力(マナ)が失われなかった世界に魔術師(ウィザード)はいない。いるのは魔術師(メイガス)のみである。
故に、この世界に存在しながらも発見されていないムーンセルにアクセス出来るのは自分達のみ。
当然、魔術師(ウィザード)がいない以上月の聖杯戦争が起こる事もなく、月の聖杯戦争を経験した者達と共にムーンセルにアクセスし、正式に聖杯に接続して外部からの干渉を不可能に書き換えた。
流石に、観測機である以上閲覧の禁止だけは出来なかったが。
ついでに、大源の魔力(マナ)の在るこの世界について知るために聖杯の記録を閲覧した。単に現在に至るまでの記録の閲覧だけなら世界の在り方に影響を与える事は無い。
だが、その過程で偶然識ってしまった。
この世界に自分達が出現した場所であるこの冬木の地にて聖杯戦争が起きる事と、その無数のＩＦの結末を。
だが、月の聖杯(ムーンセル)を使って止める気は起きなかった。
願いに貴賤は無い。
地上にてそれぞれの願いの為に足掻く者達を、例えその願いと結果がどの様なものだとしても、自分には俯瞰者の立ち位置からそれを踏みにじる事など出来なかった。

だから、自分も同じ立場で戦おうとした。この聖杯戦争を終わらせる為に。
曲がりなりとはいえ「　」と繋がっているためか、それとも記録の閲覧時に識ったのか、とにかくこの世界が想定された可能性のレールから脱線した事にも気づいた。
それは大聖杯が起動する二ヶ月前の話。
アインツベルンのマスターが英霊の座どころか根源の渦のさらに外側、根源にすら到達できぬ魔術師では決して干渉し得ない世界の存在を召喚したのが原因である。
ところがその存在は、近くをたまたまずれ違った並列宇宙であるこの世界の召喚の祈りを傍受し、挙句にその喚び出しに割り込んだイレギュラーだ。
その願いの在り方は置いておこう。
元より違う世界の存在だ。人間と価値観が近い存在であれば良い程度の認識であった。
在り得ざる異世界同士の交錯。
その影響はあまりにも大きい。
世界規模での乱数変動。
固定値の変遷。
何より相容れざる筈の世界が、一部とはいえ重なったまま調和している。
それを察知し原因の特定までやってのけたのが、この異常を感知し突如出現した、平行世界を自由に移動できる魔法少女マジカルアンバーと名乗る女性だ。
彼女はなんら臆す事無くこの怪現象の引き金を引いたサーヴァントと接触し、結果として聖杯戦争の特性上必ず出るサーヴァントの犠牲すらなく、聖杯戦争を完結させる方法を自分達に提示した。
そしてムーンセルでは決して許されなかった全マスター、サーヴァントの協力による問題の打破を目指して、自分――いや、自分達はこの狂いきった聖杯戦争に参加した。

「おう、おはよう。今朝は無事に済んだか？」
「おはようございます、三人共」

純和風の家屋。その居間に三人で入ると、家主である赤毛の少年――衛宮士郎――と彼のサーヴァントである現代風ながらもやたらと華美な赤い洋服をまとう少女が挨拶をする。
無論召喚されたサーヴァントが現代の服を持っている訳はなく、その衣装を作成したのは自分のサーヴァントであるセイバーである。
ちなみに彼女とセイバー以外のサーヴァントは市販の服を使用しているが、彼女は律儀過ぎてセイバーの厚意を無碍に出来ないのであった。

この世界に突如出現した自分達は世界の外から来た余所者である故に、衣食住の確保さえままならなかった。
そんな自分達に何の打算も無く助けの手を差し伸べ、あまつさえ居候させてくれているのが衛宮士郎という人物である。

尤も、居候は自分達三人だけでは無い。
自分とどこか同じ面影を持つ少女が士郎の対面に座りこちらに頭を下げて朝の挨拶をする。
彼女と共にこの世界を訪れた相棒（サーヴァント）は、彼女がこの聖杯戦争において喚び出したサーヴァントと共に今台所で朝食を作っている。
自分と酷似した名を持った少女と、その少女と共にあの月の聖杯戦争を駆け抜けたアーチャー。
聞けば彼女、名と性別こそ違うものの姓は自分と同じで、キャス

ター曰く自分と全く同じ境遇から月の聖杯(アートグラフ)に辿り付き同じ願いを書き加えた、『自分が女性として生まれていたら』という可能性世界の自分らしい。

少々違うのは彼女の願いに対し、アーチャーは彼女の生存と救いを求め、彼女の望んだ救いの結果として自分達と同じ経緯を辿ったという点だろう。

そんなアーチャーは魔術師(ウィザード)でありながらも、魔術師(メイガス)である士郎の魔術(マギ)と人生の師となっている。

正義の味方という舞台装置として生きたアーチャーの個人名は失われていたらしいのだが、違う世界であり根幹が異なるにも関わらず生前の自分と同じ存在である衛宮士郎に出会い、エミヤという真名を獲得した。

アーチャーが皮肉を言いながらも士郎を鍛えているのは、人を救うことが出来なかった自分の雛形が人を救える存在と成り得るかという実験である――――というのが建前。

実際にはそれは彼のマスターの意向であり、この世界の中では何のしがらみも持たないアーチャーに、彼が生前本当に望んでいた生き方である人を救う道を歩んで欲しいらしい。

魔術師(ウィザード)と魔術師(メイガス)の違いはあれど、同一人物であるならば同じ魔術回路を使い同じ魔術(こたえ)にたどり着く事は明白。

そして魔術師(メイガス)としては半人前にも至らなかった士郎は、自分達を保護した対価としてアーチャーに魔術と生き様、そしてこれから起こる聖杯戦争の真実を教えられた上で大きく成長した。

今の彼は己の在り方とその行き着く先に築かれるかもしれない犠牲に葛藤を抱きつつも、聖杯戦争という儀式に義憤を抱いて参戦を決意。

そして先日、彼の家の土蔵にてキャスターが発見した魔法陣を使い、彼は自らの運命(サーヴァント)を召喚した。

彼女を召喚する際、そのあまりにも鮮烈で幻想的な運命（きせき）の場に立ち合わせた時の事は今も鮮明に思い出せる。
召喚の呪文を唱えた士郎を中心に、土蔵の内部は広大な草原へと変貌した。
そこに佇んでいたのは、鎧も剣も身に着けず、白い洋服を纏った一人の少女。
英霊どころか戦いに身を置く者には到底見えない少女は、士郎の下に歩み寄り透明な雫を瞳から零しつつも、蕾がほころんだ様な笑みを浮かべて士郎を抱きしめた。

「ただいま、シロウ」

その言葉には、幸福を噛み締める様な響きがあった。

蛇足に過ぎない事を語るならば、その時は士郎に埋め込まれた鞘を触媒にセイバーという器を利用し、妖精郷（アヴァロン）からこの場に現れたらしい。
彼女の願いは一人の少女、アルトリアとして士郎と共に在る事。
その正体はガウェインの主君、アーサー王。
聖剣を泉の貴婦人に返還し、現在も妖精郷にて眠り続けている彼女の見る夢の具現。
彼女はもはや聖杯を求めておらず、やがて蘇る王であるため英霊の座にはいないらしい。
主武装は士郎から返還された鞘と魔力で編んだ鎧、そしてアーチャーが投影する勝利すべき黄金の剣（カリバーン）（ただし持ち歩けないため戦闘

時に投影してもらう予定）。
彼女に何か思うところがあったのか、アーチャーは始終感慨深くその様子を眺め――――嫉妬したマスターである少女に顎を撃ち抜かれていた。
なんでも、アーチャーはあの遠坂凛にも何らかの縁があるらしく、この世界の凛に興味を示しては、もう一人の自分である少女の為とキャスターから一夫多妻去勢拳を撃ち込まれている。
悶絶して倒れ伏すアーチャーの屍が、未来の自分の姿を暗示している様で怖かった。

「お、お待たせしました」
「待たせたな」

そう言ってアーチャーとかつて保健室にいたＮＰＣだった少女、間桐桜ことサクライダーが和食の朝食を配膳する。
聖杯戦争が進む内、自我らしき物に目覚め始めていた彼女は、こうして召喚される事で完全なる個として確立した。
聖杯戦争という舞台を失った彼女は役割にあぶれ、消去完了寸前の自分をこうして召喚することで助けた『女性として生まれた方の自分』に恩義を感じているらしい。
尤も、消去されている最中に喚ばれたために、元となった人物の幾つもの可能性を取り込む事で復活したためか様々な力を持つ事になった。
その影響か士郎に一目惚れし、度々彼のサーヴァントのセイバーと対立している。
彼女が別の聖杯戦争で召喚するサーヴァント・ライダーの能力や宝具を使用できる他、冬木の聖杯の中で生まれようとしているアヴェンジャーの力を代償無し、問答無用で使役できる魔法少（？）女

モードもあり、その際には赤セイバー、キャス狐、アーチャーの三人を同時に相手にして持ちこたえられる事すら可能なポテンシャルを得る。
だが、実際の戦闘経験の無さとアーチャーが何故か彼女の攻撃パターンを全て読みきるため、魔法少（？）女モードで彼女が勝利したためしは一度もない。
ちなみに彼女を喚び出せたのは、何故かアーチャーが持っていた彼女の弁当箱が触媒になり、召喚者の『女性として生まれた自分』と彼女の世界のムーンセルに縁が出来ていた事が原因らしい。
彼女の望みとは日陰の身からの脱却。こうして存在する事でそれは結果的に叶っている為、聖杯に望む願いは無いとの事。
また、王としての在り方には相容れぬものの、最終的に己の行いを否定しなかった二人のセイバーは相性は壊滅的だが仲は良い。
逆に赤セイバーとキャス狐は相性的には最高なのに仲は険悪という有様で、度々自分を巡って泥沼の愛憎劇を繰り広げる。
おかげでもう一人の自分ともいえる少女には、絶大なまでの信頼と、理屈では理解できても納得は出来ない故の二股（四股？）男としての軽蔑を向けられている。
その最大の理由は、アーチャーの煮え切らない態度へのやつあたりであると確信しているが。
かくして騒々しくも平穏な日々が衛宮家で続いていく。

――願わくば、生きているという奇跡を変わらず噛み締めていられる事を。

？？？、女性版？？？（マスター）、ネロ・クラウディウス、無

銘（エミヤ）、玉藻の前、衛宮士郎（マスター）、及びサーヴァント・セイバー（アルトリア・ペンドラゴン）、サーヴァント・サクライダー（間桐桜）、参戦決定。
チーム・イレギュラーズＥＸＴＲＡ、結成。

エンディング条件。

ＢＥＳＴ　ＥＮＤ：条件・全てのチーム内から死者を一人も出さずにイリヤスフィール・フォン・アインツベルンが第三魔法を実行し延命に成功する。ただし、第四次聖杯戦争の時点で死亡が確定された言峰綺礼は死者としてカウントしない。

ＢＡＤ　ＥＮＤ：条件・小聖杯であるイリヤスフィール・フォン・アインツベルンの死亡。

超番外編。Ｆａｔｅ／ｄｅａ ｅｘ ｍａｇｉｃａ（後書き）

超番外短編として思いついたはいいものの、三話までの合計文字数を上回る結果に。

しかし、書きたくなったら止まらなくなるのが現在の筆者の病的な問題点。

ラストまでの構想はあるものの、これ以上連載は増やしたくないので没に。

でも、要望があれば時々ＯＭＡＫＥでいくつかハイライトを書くやも……？

第四話　外の世界（前書き）

取りあえず、勢いが続く内に続きを。
本編の一年も前からのスタートは早すぎたかもしれない。
本編の一ヶ月であれなら、一年でどれだけ魔女が出るのだろう？

第四話　外の世界

その翌日。
マミの家に居候が決定した悠は、暇を持て余していた。
理由は単純。マミと生物（なまもの）が学校に行っているからである。
一応予備の鍵を渡されているため散策は出来るのだが、外に出て五分で戻る羽目になった。
悠が幻想郷に入ったのは戦後の話。
技術が発達し複雑化した外の世界は、すぐに対応できるものではなかった。
まして、世界そのものも違っている。
余計な事をして問題になれば困るのは悠とマミだ。
悠は突如この世界――の魔女の結界に神隠しによって出現した存在であり、身分証明が出来る物などこの世界のどこにもない。
魔女以外の人外が存在していないこの世界に、悠という異端が許容されるわけもない。
下手に拘束されてしまえば、悠が原因でこの世界は変貌、消失する可能性すらある。
迂闊な行動を取るわけにはいかない。
流石にマミの私物をあさるわけにもいかず、手持ち無沙汰なままずっと窓から風景を眺めていた。
細い三本羽の風力発電機。
塔の様に聳え立つ長方形の建築物、ビル。
偶然にもかつて諏訪の国の一部だったこの地は――そう、怪物とでも称するべき進化を遂げていた。

「――――――」

ふと、音にならない声が聞こえた気がした。

気のせいであるには違いないが、もし声の主がいるのなら、その感情はきっと――呆れと賞賛から来た物だったのだろう。

帰宅したマミと生物と共に魔女退治に街に出る。

昨日魔女退治に協力すると申し出た時には、マミが猛烈な勢いで反対した。

あまつには自分の変える場所（にちじょう）になって欲しいとまで言われたのだから、嬉しくないはずがない。

実際、悠はまともな殺し合いなどした事がない身である。

その身は無敵にして最弱。攻撃力は成人男性程度しかなくとも、まともに攻撃を受けたためしがない。

絶対安全圏に身をおくが故に、殺される覚悟など必要なかった。

まして、妖怪が人を襲う事も形骸化している幻想郷では尚更だ。

結局、マミの拳からマスケット銃の一撃に至るまで実際に無効化して見せた事で、彼女もしぶしぶながら納得してくれた。

妖怪を容認する身である以上、悠が人を殺す魔女に対して特に思うことは無い。

それでも魔女退治に付いて行く理由は、悠が彼女の事を気に入ったという一点のみである。

とは言っても、魔女の出現頻度とは決して多いとは言えない。
一体倒したばかりだから、次と遭遇するのは早くて三、四日後だろうとの事。
それでもこの町の出現頻度は他の地より大幅に高いらしいのだが、少し人里から離れれば人食い妖怪に出くわしやすい幻想郷に比べれば、そう大した事はない。
自然、この日の魔女退治とは、この見滝原町の見学ツアーとなった。

「いや、凄く人が多いな」
「あら。都会に行けばもっとすごいらしいわよ？」
「流石にそれはごめんだ。うっかり人酔いしちまう」

今では地球の総人口は６９億人を越えており、この日本だけでも一億三千万人に迫るらしい。
それは流石に増え過ぎていると思うのだが、魔女の有無に関わらずその内勝手に減っていくだろう。
自然から乖離した存在である以上安定する事もないだろうが、まあ、自滅である分には勝手にしろといったところである。
しかし、それだけの人間がいれば魔女という存在が次々湧いて出るのも当然であろう。
そう、当然である筈なのだが、いまいち納得がいかない部分もある。
なぜなら、聞くところによると魔女は人間には認知されないらしい。
神霊や妖怪は人の想いから生まれた存在ではあるが、逆に認知されなくなれば弱体化、消滅してしまう。
どちらかというとそれらの存在は人に必要とされるために存在し、

人に必要とされなければ消えていくモノだ。
だが、魔女は人からの認識を必要とせずに存在している。
人の想念から生まれたにも関わらず、存在維持の為に人の想念を必要としない存在。
それを、知識により構築された自分は在り得ないと断じ――――
その外側で、当たり前だとせせら嗤う自分がいた。

「妖怪に神様、かぁ……」
「魔法は本来不可能な事をを可能にする。君の世界の人間が僕達に頼らなくても魔法を使えるのなら、そういう存在を生み出したとしても不思議じゃない」

悠が元の世界の事を少々話すと、マミは怪訝な顔をして、生物はそれを否定する事無く受け入れた。
まあ、その魔法ですら寄せ付けないのが悠という異端なのだが。

「それで、だ。もし人間が絶滅したら、魔女はどうなるんだ？」
「そのまま残り続けると予測されているね」

あのようなラクガキみたいなモノが席巻する世界。
神霊や妖怪は自然の具現、あるいは何らかの事象にカタチを与えられたモノであり、人間と違って自然寄りの存在だ。
だが、あのラクガキは異質すぎる。あれでは人間はおろか、世界にも適合出来ない。
人がいなくなったところでアレは変化せず、やがて世界の全てをも浪費するだろう。

「しかし、まあ……」

それでも、この町に魔女が出現しやすいというのは何となく理解

できる。
ここはかつて土着神の頂点たる諏訪子が統べていた地であると共に、幾ら知名度が高いとはいえ強く信仰する者を失ってなお力ある神霊であり続けたあの二人のいた場所だ。
あの二人がこの世界で生を受ける事はなかったが、それでもこの地にはそういう存在が安定しやすい力場でも形成されているのかもしれない。

「綺麗だな」

夕日に照らされた町。
喧騒に満ちた世界。
昨日とよく似た今日を過ごし、変わらぬ明日を享受する人々。
そのありふれた日常が、目を灼く様に眩しかった。

「そう、なのかな」
「ああ。俺達はもう普通じゃない。だから、あの中に溶け込む事は出来ないけれど――」

――こうして、眺めて慈しむ事くらいは許されるだろう。

「……随分達観しているのね」
「まあ、長く生きているからな」

不満そうに口を尖らせるマミに苦笑する。
この少女はちゃんと判っている。
裏を知ってしまった以上、表に戻る事は困難だ。
知らない振りをする事は出来ても、知らないままの者達と本当の意味で分かり合えることは無い。
世界は変わらない。日常もそのままである。

にも関わらず、真実を知った者には世界の全てが一変してしまった様に感じてしまう。
知らない方が良い事実を知ってしまった者は、今までと変わらない日常を自ら拒絶してしまうのだ。
知らないままに、暗闇に目を凝らす事無く生きていく事は、とても幸福なのである。

「ところで、毎日こんな事やってるのか？」
「ええ。放置するわけにもいかないでしょう？」
「まあ、それはそうなんだが……」

毎日町を散策して魔女退治を行っているらしいが、あくまでそれは中学生だから出来ている事だ。
このまま高校、大学に進学し就業するつもりなら、必然魔女退治に割ける時間は限られる。
それを彼女に伝えると、やや苦い笑顔で首を横に振った。

「そういうのはもう諦めてるの。魔女から人を守る事の方がよっぽど重要だもの」
「いや、生活とかどうする気だよ、おい」

社会に所属せずに生きる事は難しい。
金銭的な面は勿論の事、人と人との繋がりが精神をも支えている。
それどころか、社会という物は適合出来ない者を排斥しようとしてくる。
まして、その対象が異端であるなら尚更だ。

「そうね……。まあ、今は中学を続ける積りよ。知り合いには、学校にも行かないで魔女狩りを続けている子もいるけれど」
「ふーん。まあ、いいさ。先送りも立派な答えだし」

過去を否定しないなら、幾ら後悔したって構わないだろう。
そう言って意地悪く笑うと、マミは小さく眉をひそめる。
「……貴方という人がよく分からなくなってきたわ」
「俺は当たり前の事を言ってるだけなんだがな。一人の幸福は多くの不幸の上に成り立っている。自分の行いを幾ら後悔しようと別にいいけれど――――」
――――今までに積み重ねられた犠牲。如何にそれらが無価値であったとしても、無意味と切り捨てる事は許さない。
その、口から自然と漏れた言葉に、隣を歩いていた少女は目を丸くして立ち止まった。
「どうした？」
「あ、いえ、驚いていたのよ。冷たい様に見えて、本当は優しいんだなって」
返された言葉に、今度は悠が驚かされる。
憎悪をぶつけられる事は何とも思ってこなかったが、優しいと評価されるとは思わなかったからだ。
「人を助けられなかった事なんて何度もあった。だけど、貴方はそういう助からなかった人達の事まで大切に思っているのね」
「別に同情しているわけじゃないぞ。勘違いは止めてくれ」
「ええ。分かっているわ」
別に優しいわけでも何でもない。
人間は犠牲の上にしか幸福を築けない。

その幸福を肯定するのなら、あらゆる非道、あらゆる無情の上に生まれた犠牲をも容認する。
これはただ、現在(いま)を織り成す全てを肯定しているだけなのだ。
「よく分からないね。それなら、何故君は僕達の事を否定するんだい？」
「俺がお前を否定するのは、俺個人の感情が原因じゃないんだよ」
マミを挟んで反対側を歩く生物に悪態を付く。
この生物が悪意から人間を利用するというのなら、その結果を問う事無くその存在を肯定しよう。
だが、コレは善悪という観念すら持っていない、本質からして人とは相容れぬものだ。
悠の内に湧き上がる生物への嫌悪は、悠個人の内から生じたものではない。
ならばこの嫌悪は、人間という存在がこの生物を否定しているという事実の露呈である。
「どういう事？　人は感情で動く生き物だって言ってたじゃない」
「ん、ああ。コレを否定しているのは俺自身じゃないって事」
林檎が木から大地に落ちるように。あるいは水が高い所から低い所に流れるように。
悠がこの生物を否定するのもまた同じ。
これは、己の与り知らないところで決められた原則に過ぎない。
「ああ、だからそんな不思議そうな顔をするなよ。俺自身の感情を問うなら、単に気に食わないって思ってるだけだから」
「私としては、二人共仲良くして欲しいのだけど」
「僕としてもそう願いたいんだけどね」

「マミがそう言うなら、妥協はするよ」

どの道、現時点で悠に出来る事などそうない。

一人の人間の行動でどうにか出来る問題では無いし、そもそも問題を解決するのは外来人（よそもの）ではなくこの世界（とうじしゃ）の人間の仕事である。

「そういえば、魔法少女も年を取るんだろ？」

「ええ、そうよ？」

マミから当然の答えが返る。

でなければ、マミは数年前から今の容姿である事になる。

流石にそれでは、周囲に不自然に思われる事を避けられない。

「でも、年食ったら戦うのは大変じゃないか？」

「その辺りは心配要らないよ。老化による身体能力の低下は魔力による強化で補えるし、その気になれば老化を止める事だって出来る。戦いに臨む以上、魔法少女の平均寿命が短いのは仕方がない事だけど」

魔力。奇跡を起こし、使うことで穢れを生み出す力。

おそらくは幻想郷の魔法使いが使う物とは別物と捉えた方が良いだろう。

あちらでは魔法というのは一種の学問であり、研究された結果ある程度の理論が成立している。

過程を無視して願いを実現させるなんて力は、はっきり言って歪すぎる。

大体、奇跡を行使するのは神霊の役割だ。人の手には余る力こそが奇跡なのである。

ふと、沈みかけの夕日を見た。

一日の終わりを告げる落陽。

幾万回と見慣れたそれが、何故かとても貴いものの様に思えた。

「……暗くなってきたな」

「そうね。近くにオススメのお店があるから食べて行きましょう？」

「いいのか？」

「ええ。家族が増えたお祝いという事で」

小さく微笑むマミ。

いつの間にやら、悠の身分は居候から家族にクラスチェンジしていた。

保険やら保護やらで生活に余裕があるのは知っているが、負担になるのはあまりよろしくない。

だが、嬉しそうに笑う彼女の好意を無碍にするのも気が引ける。

どの道帰る方法もないし、今さら還りたくもない。

どれ程続くか分からないが、そうやって彼女の歩く道をを見届けるというのも一興だろう。

「じゃあ、ゴチになります」

「ええ、これからもよろしくね」

笑みを浮かべて手を引く彼女に付いて行く。

願わくば、彼女が最後まで笑っていられる未来の一端を担える事を。

その夜、夕食の席で。

「ところで、俺みたいなのを家族にしていいのか？」

「何か問題があるの？」

「いや、俺みたいな男が居たら、恋人とか連れて来づらいんじゃないかな、と」

「い、いないから！　恋人なんてまだ早いから！」

顔を真っ赤にして慌てふためくマミを弄るのは、非常に楽しいという事を知った。

第四話　外の世界（後書き）

この主人公はペドじゃないですよー。

第五話　魔女との戦い（前書き）

悠の初戦闘。
同時に楔を方々へ打ち込んでおく回でもあったりします。

第五話　魔女との戦い

魔女探索を始めて五日目の夜。
二人と一匹は遂に魔女の結界を発見した。
場所は繁華街のとある路地裏。
マミがソウルジェムを掲げると同時に結界の入口である魔女の紋章が輝き、異界への入口が開く。

「ああ――なんて、陳腐」

前回の塗りムラだらけの結界に比べ、今回の結界はむしろ現実感のある方だと言えよう。
それでも前衛的な絵画のような世界である事に変わりは無いが。
無数の十字架が乱立する世界。
夜であるにも関わらず明るく発光する、それほど高くない塔。
童話の類いであれば、あの頂点にこそこの世界の王が君臨している事だろう。
尤も、塔へと至る路地裏の延長のような道には、十字架の先を杭の様に尖らせた武器を持つ黒服のマネキンが徘徊していたが。

「――来る！」

マミが警告を発すると同時に、十字の杭を突き出し突進して来るマネキンども。
アリスの人形と比べる事すらおこがましい程適当なデザインのヒトガタを前に、悠は前進しマミは後退する。

それは、あらかじめ決めていた作戦通りに。
かくして悠へと無数の杭が突き込まれ、しかし一つとして服に綻びすら作る事は出来なかった。
反動すらない力の消失によって停止したマネキンどもにマミの放ったリボンが横一直線に奔り、その首を切り落とす。
元々マミの願いは『命を繋ぐ』事であり、リボンによる拘束、切断が魔法の基本だった。
マスケット銃や大砲はそこから派生した後付けの物でしかない。
ならば単発式の銃を使い捨てで幾つも使うより、基本を極めた方が効率的だ。
威力は高いが連射が出来ず、隙が生まれる銃はあくまで必殺、もしくはブラフ。
言葉通り、確実に殺す為に運用した方がいい、というのが先日決まった戦闘法である。
また、リボンと銃のどちらもマミは使いこなせているとは言えない。
幻想郷における異能力者と同じで、いかに自らの能力を理解し応用を利かせるかによって戦闘能力は大きく上下する。
リボンはあくまでマミの生み出したイメージであり、その気になれば魔法の媒体を別の物に切り替える事も、効果をより複雑かつ強力な物に変化させる事も可能だろう。
銃の方も近代兵器を参考にすれば、例え銃そのものは単発式でも、弾に細工を加えることで、貫通弾、炸裂弾、散弾、閃光弾、催涙弾など多彩な運用が出来る筈である。
魔女に催涙弾が効くかは不明であるが。

とはいえ、悠が囮になってマミが殲滅するという戦法はこれ以上無く有効だった。
大した知能の無い使い魔は悠に殺到するが、生憎一定の条件下以外では悠への攻撃は無力化される。

そしてマミは離れた位置からリボンを二閃、三閃するだけで使い魔の首を全て刎ねていく。

塔の三階まで上り、あらかた使い魔を片付けた所で意見交換の為にマミと距離を詰める。

とはいえ、彼女は楽しそうな笑みを隠そうともしていない。

一応これは弾幕ごっこなどではなく、正真正銘殺し合いの場である筈なのだが。

「本当に出鱈目ね、貴方」

「笑顔で言うな、笑顔で。それに、この程度じゃ大した事ないぞ。幻想郷だと」

具体的に言うと、守矢神社のヒエラルキーにおいて頂点に君臨する風祝とか、核融合の力を扱う？2号とか。

後者は地底から出て来ないが、前者はキレるとハリケーンを起こすので本当に危険なのである。

それに比べれば、不老不死程度は天人だけでなく人間にも持っている者がいる、驚くに値しない能力なのであった。

「……核融合？」

話を聞いて呆然としたまま呟くマミ。

どうやらこの世界では、核融合発電は実用化に至っていないらしい。

「ああ。地獄烏に八咫烏を降ろして太陽の力を使えるようにしたんだ。ただ、核融合に使うのは普通重水素で、普通の水素は使い物にならない筈なんだが……その辺どうよ、生物」

「不可解極まる話だね。二重水素は僅かとはいえ確かに自然界に存

在している。だけど、その核融合を起こすためのエネルギーはどこから生まれているんだい？」
「そりゃ、人間の太陽信仰だろう」

宗教なんてものが生み出される前から、人は地に光をもたらす太陽を神として崇めていた。
大和の神霊への信仰が失われようとも、太陽そのものに向けられる畏敬の念は失われていない。
納得のいかない様子の生物は放って置いて、なにやら眉をひそめているマミの方に視線をやる。

「神様、かぁ。この世界にも神様がいたら、魔女退治なんてしなくても良かったのに」
「代わりに妖怪が人を襲ってたけどな。現代になって妖怪が科学に否定された今、神様も大した力を使えないし」

ただし、一神教の連中は別である。
教徒の数は大和神霊の信者の比ではなく、中には狂信者なんて連中もそれなりにいたりする。
信じている宗教の教義を逸脱してまで信望するのはどうかと思うが。
まあ、大体そういう神が扱うのは死者の魂なので、顕界で生きている人間に干渉してくる事は早々無いのだが。
その時だった。気が完全に抜けていたマミが、はっと顔を上げる。

「――え！？」
「どうした？」

マミはその問いに答えず、突然辺りを見回しだした。
何事かと思ったが、彼女も事態を把握できていない様だ。

「今、声が聞こえたような……」
「いや、別に声なんざ聞こえなかったが」
「僕もだね」
「そ、そう……？」

悠と生物の答えに首を傾げるマミ。
だが、突如下を向いたかと思うと、後ろに飛び退りながら悠の足下をリボンで切り裂く。

「魔女っ！？」
「は……？」
「マミ、どこに魔女がいるんだい？」

警戒をあらわにマスケット銃を一本構えながら、もう片手からリボンを数条伸ばすマミ。
その鋭い視線は悠の足下に向けられている。

「おい、生物。魔女はこの下か？」
「いや、上から魔力の反応はあるけど、下には無いね。大体、ここに来るまでに使い魔は全て倒しちゃったじゃないか」
「……え？」

こちらの会話に呆然とするマミ。
彼女はソウルジェムを持って悠の下に歩み寄るが、ソウルジェムに変化は見られない。

「貴方、魔女じゃないの……？」

果てには、彼女は床に向かって話しかけ始めた。

その視線の先にあるのは、白一色の床とそこに落ちる影のみである。
そのマミの行動を生物は不思議そうに観察し、悠は我知らず彼女の行動に口の端を歪めていた。
「いえ、それはご丁寧に……って、ええっ！？　人間なんですか！？　その姿で！？」
「ねえ、マミ。君は一体誰と話しているんだい？」
「誰って、この自称人間さんだけど？」
そう言ってマミが指差したのは悠の影。
どこからどう見てもただの影である。勿論言葉を話したりもしていない。
「あ……魔力を持ってる存在だけが知覚できるんじゃないかって言ってる」
「それは、魔女の被害者が影の中に閉じ込められているって事かい？」
「……違うって。結界の中でやっと話せる様になったって言ってるわ」
生物の問いに影の言葉を通訳するマミ。
その様子に、昔話に出てくる影小僧という妖怪を思い出す。
残念ながら、影小僧を幻想郷で見たという話は聞いた事が無い。
大して脅威の無い弱い妖怪は幻想入りする前に消えてしまったのだろうか。
もしかしたら、既に退治されてしまったのかもしれない。話では実害の無い妖怪だった筈だが。
「で、その影小僧は何て言ってるんだ？」

「これ、影小僧なのかしら。影というか、幼稚園児の落書きより酷い絵にしか見えないけど。……あ、ごめんなさい。悪気があったわけじゃないの」

影に向かって頭を下げるマミ。

落書き。

ラクガキ。

思い当たる節がないでもないが、この生物の前であまり余分な事を話さない方がいいだろう。

「で、何の用だったんだ？」

「何かあったら貴方を頼れって言ってたわ。悪人には違いないけど、キュゥべえよりは遥かにマシだって」

「は、悪人か」

間違っていないだけにコメントし辛い。

まあ、人を理解するという点においては、この生物とは比べ物にならない程マシである事は自負できるが。

「貴方、悪人なの？」

「ああ、その通り。ただ、善悪の観念は時代と共に変化する。それが善だったのか悪だったのかは、後の時代の人間が判断する事だ。閻魔が言うには、人間は生きているだけで罪を重ねるから、功徳を積み続けなければならないらしいが」

尤も、この世界には閻魔や地獄が存在するかどうかも不明だ。

神がいないなら仏がいなくても不思議じゃない。

「生きているだけで罪だなんて……」

「言っただろう？　一人の幸福は複数の不幸の上に築かれる。犠牲

無しに生きられないのが人間という生き物だ。ま、閻魔の裁判は現世の法律と一切関係ないんだけどな」

彼岸での裁判は閻魔の一存で罪状が決定される。現世での犯罪＝罪ではないのだ。

それを聞いたマミは苦い顔をする。

「じゃあ、どんな悪い事をしても閻魔様が許せば許されてしまうの？」

「まあな。尤も、積んだ悪行を越えるだけの善行を積むのは大変そうだが」

おまけに、過去を覗き見る浄玻璃の鏡と白黒はっきり付ける程度の能力を持っているため、閻魔を前にして罪をごまかす事は不可能である。

だから、閻魔一人の手でも厳格かつ公正な裁判が行なわれている。

ちなみに、今の地獄は財政難で三途の川の渡し賃の他に出店もやっていると言うと微妙な顔をされた。

「なんだか、妙な所で世知辛いのね」

「幻想は幻想の中に存在してるんじゃない。きちんと現実の中に実在してるんだよ」

問題は、現実の常識が幻想郷では通じない事だが。

迷い込んだ外来人は大抵妖怪に喰われるし。

「……あ、はい、分かりました。魔女が動き出したみたいだから、先に進んだ方がいいって言ってます」

「みたいだね。上からの魔力が強くなってきてる」

影の言葉を通訳しながらマミはマスケット銃とリボンを確かめ、生物もその意見に同意する。

「じゃあ、魔女(ボス)は予定通りの手順でしとめよう」

「ええ。あちらもお呼びの様だし、ね！」

首を刈られたマネキンの残骸が転がる部屋。

その入ってきた扉とは反対の扉をマミのリボンが貫き、切り裂く。

同時に二人と一匹はその奥へと引き込まれる。

いや、周囲の空間ごと移動させられていると表現した方が正しいだろう。

そして一際大きな扉が開かれる。

目の前に広がっているのは古い法廷場。

背が異様に高い椅子の裁判長の席に陣取っているのは、巨大な木鎚を持った人型の異形。

異常なまでに腰から上と手が長いソレは、葬儀人を思わせるような黒い服に身を包み、毛糸のような茶色の髪を真っ直ぐ上に立てていた。

その顔は四角。ただ、その中に鴉避けのような三重の黒丸が描かれている。

あれが、魔女。

――ああ、アレはもう終わっている。

目の前の亡霊にも劣る魔女(リビングデッド)にどことなく親近感を感じながら、その殺害を決定する。

アレはもう既に助けられないモノだ。

死体(バケモノ)に人の道理を語りかけたところで意味などない。

作戦通りに真っ正面から走り寄る。

マネキン達は傍聴席に立ち、被告(ゆう)に判決(しさい)が下される時を傍観して

いる。
魔女はその長い手で巨大な木槌を振りかぶり、思い切り叩きつけてきた。
そして、停止。
掲げられた悠の手に木槌が触れた瞬間、そこに存在していた運動エネルギーが完全に消滅したのだ。
おそらく思考らしい思考もないだろう魔女(ざんがい)に、木槌の下をくぐるようにしてさらに詰め寄る。
悠が魔女に攻撃を加えるには裁判場の台が邪魔だが、元よりそれは意味がない。
悠の攻撃能力は無に等しく、されど囮(デコイ)としてはこれ以上無い程に適格。
振り下ろされていた木槌が今度は横殴りに悠を襲うも、悠に触れた時点で再び停止。
同時に魔女の座る席に四発の弾丸が連続で撃ち込まれ、そこから伸びたリボンが魔女を席に縛り付ける。
未だその両腕は自由なものの、元より問題などありはしない。
悠が木槌を掴んでいる以上、魔女は木槌を僅かたりとも動かす事すら出来ない。
椅子に拘束したのは、万が一にも逃げられない様にするための保険である。
そして、魔女の頭のやや上に一際大きい弾丸が撃ち込まれる。
その弾丸から伸びたのは、非常に細く薄いリボン。
そのリボンは鞭の様にしなり、魔女を縦に両断した。
加えて、正中線で二つに裂かれたその両方の頭部と胸部に一発ずつ、計四発の弾丸が追撃として穴を穿つ。
最後に巨大なリボンが横に一閃。魔女の両腕と胴体を切り裂く。
オーバーキルもいいところだが、条理の内に生きていない存在を葬るにはこのぐらいでも足りるかどうか。
身体をバラバラにされた魔女はそのまま重力に引かれて椅子から

崩れ落ち、黒い靄の様に消えてしまう。
そして周囲の景色が蜃気楼の様に歪み、裁判場――魔女の結界――は傍聴席の使い魔共々消滅した。

そして風景が変わり元の路地裏に戻る。
結界に入る前と同じ位置に二人と一匹は立っていた。
違っているのは、黒い球体から針が出っ張った物が転がっている事か。
その物体の名はグリーフシード。嘆きの種の名を冠する魔女の卵。
グリーフシードはソウルジェム内の穢れを吸い、濁りが無くなったソウルジェムは再び元の輝きを取り戻す。
マミのソウルジェムから黒い靄のように浮き出た穢れがグリーフシードに吸収される様子を眺める。
そして得た感想は一つ。

「薄いな」
「え？」

マミが疑問の声を上げ、それに対して説明をしながら情報を整理する。
そう、穢れと呼ぶにはあまりにも負のエネルギーの質が低く濃度が薄い。
其は神が祓う世に満ちた穢れなどとは比べ物にならない程に小さな物。
幾らこのような物を取り込んだところで、あの魔女という存在が生まれる筈が無い。
穢れを溜め込んだグリーフシードは孵化して魔女に成るという情報からして、おそらく穢れとは魔女の活動に必要なエネルギーに過

ぎない。
それは魔女を生み出す切欠になっても、魔女そのものには成り得ない。
元より穢れが如何に溜まった所で、確かなカタチを与えるのは人間の仕事だ。
カタチを与えられない穢れは、現象として溜め込んだ負のエネルギーを発散する。
だが、人間が知らない所で魔女が生まれるのであれば、それは単なる自然発生とは考えにくい。
何より、アレはもう終わってしまったモノだ。
終わる前の、魔女の元となったナニカが必要な筈である。

「終わってしまったモノ？」
「ああ。アレの意識は自分の内側にしか向いていない。人は他人や周囲といった外と関わって生きている。それとは逆に、アレは己の内側だけを見ている。己だけの幸せに耽溺している、と言った方が正しいか」

マミの疑問に返事をすると、彼女はグリーフシードを凝視する。
しかしそれで何か答えが出せた様子は無く、彼女は首を横に振ってソレから目を背けた。

「絶望や呪いを撒き散らすのは目的じゃない。魔女の被害を勝手にそう呼んでるだけで、アレはあくまで人間を活動のエネルギー補給源か耽溺している事の対象にしているだけだ。さっきの魔女は、多分ああやって人を裁く事を楽しんでいたんだろう」
「外に絶望して呪った結果、そうやって自分の内側に閉じこもったって言うの？」
「まあ、そんなとこじゃないか？」

生物に視線をやるも、首を傾げるだけで返答しない。
詳しく説明する気はなさそうだった。
嘘は吐かないが、ピンポイントな質問でないと都合の悪い事には答えない様だ。
マミも何か言いたい事があるようだが、結局彼女がそれを口にすることは無く、その口から漏れたのは重いため息のみ。
暗い雰囲気に浸っていてもしょうがないので、明るい声でマミに別の話を振ってやる。

「ま、実験の成果の方は上々か。応用は上手くいったな」
「……ええ。基本に立ち返るのも大事だってよく分かったわ」
「ならいい。ただ、随分楽しんでたみたいだが、殺し合いだって事を忘れるなよ？　どんな汚い手を使おうが、どれ程みっともなかろうが、生き残る事が一番大事なんだから」
「そうね。反省するわ」

流石にはしゃいでいた事への自覚はあるらしい。
油断や慢心から死んだのでは悔いが残ってしまう。
「日常（へいおん）と非日常（ころしあい）のスイッチぐらいきっちり作っておけよ。失敗しても、生き残ればまたやり直せるんだから」
「はーい」

まだ上の空な様子のマミの頭を、軽くぽんぽんとなでてやる。
やや下に向いていた視線がこちらの目と合う。
その暗い顔を止めさせるために、口端を大きく吊り上げて笑みを表現してやった。

「よく頑張ったな」
「――――」

マミはかけられたその言葉に目を丸くして驚く。
やがてその言葉の意味を噛み砕いたのか――

「ええ！」

――彼女の顔に、満面の笑みが浮かんだ。

こうして、二人の初めての魔女退治は終わりを告げる。
今日と大差ない明日を守るための戦い。
明日からもマミは中学へ通い、その間悠は退屈な留守番の日々が続く。
それが、二人の今の日常だ。
だが、やがて彼女は中学を卒業する。
そうなれば、裏方として魔法少女の活動をする傍ら、二人で共に日常を過ごす事になるだろう。
その日常がどの様な物になるかは、あくまで彼女の選択次第である。
先は長い。
いずれ終わりは来る事が分かっていても、それまでの全てを楽しみたいという気持ちだけは抑え切れそうになかった。

その夜。
マミの部屋にて。

「いや、いいのか？」
「何よ。見返りをくれるって言ったのは貴方でしょう？」

マミの文句にハイハイと素直に従っておく。
ベッドで布団に包まっている彼女の手は、その脇に座る悠の手を握っていた。

「寝るまで手を握ってて欲しいとか、どこの風邪引いた子供だよ」
「あら。まだ十四歳の子供よ？」

照れ隠しに悪態を吐くと、こちらの内心に気付いたのか彼女は意地の悪い笑みを浮かべる。
マミはようやく己に素直になり始めていた。
良い意味でも、悪い意味でも。
その事が一年後にどの様な変革をもたらすか、未だ誰も知るものはいない。

第六話　出会ってしまった二人と一人（前書き）

今回キュゥべえが後半出ていませんが、アレはいつもマミと一緒では無いという事で一つ。
ぶっちゃけ、アレが絡むと文量がとんでもなくなるので。

第六話　出会ってしまった二人と一人

マミの家で生活を始めて一ヶ月余り。
外の世界、というよりもこの世界の文化にも流石に慣れた。
魔女の襲来は週辺り一から三体。
流石に身分証明がなければ、夜に女児を連れ歩く二十歳頃の男は不審がられるかと思っていたのだが、案外何とかなるものだった。
具体的に説明すると、生物（なまもの）との交渉により普通免許証（偽造）を手に入れたのだ。
魔法を使えるのなら認識阻害ぐらいは頼めるかと思ってマミに相談したのだが、魔法は願いによる物であり万能では無いと断られた。
そういえば、幻想郷の魔法使いもあくまで研究者であって万能では無い。
むしろ万能さで言うなら早苗の奇跡の方が圧倒的に上である。
……使う本人はアレだが。
それはさておき、そこでマミが相談を持ちかけたのがあの生物だった。

「わざわざ魔法に頼らなくても、身分証明さえすれば済む問題じゃないか」

そんな事に魔力を使う方が無駄じゃないかい、と一蹴する生物。
そこで取引を持ちかけたところ、あっさりと生物は戸籍と免許証を偽造してのけた。
無論代償はある。
マミが生きている限り、悠はこの世界に残り続けるという約束。

場合によっては魔女を倒すために契約をしてもいいと可能性(エサ)をちらつかせた事の方が、意味合いは大きかったのかもしれないが。
悠の魔法係数、抱え込んだ因果の量は過去最高――――というより、もはや異常に大き過ぎて生物にも計測不能らしい。
悠ならば、単一の願いではなく己の望んだ未来(こうふく)を実現出来る可能性すらあるという。
勿論、そんな未来(モノ)はお断りだった。
自分の望んだ未来が実現されたとして、ならばその未来の住人は意志を持って生きていると言えるのか。
結局悠の望んだカタチに全てが集約されるというのなら、世界に存在する全ての命は悠の為に存在する道具に成り下がる。
世界は平等に不平等で、人の望む慈悲など与えない。
だが、その中でなお意志を持って前に進むからこそ、人という存在は愛おしい。
その宣言を生物に叩き付けた際、何か感じ入るものがあったのか、マミはその日始終機嫌が良かった。

――尤も、それは傍観者の視点から得た結論だ。
永い時を経る間、人の営み、移り変わりを観測し続けた結果抱いた想い。
そんな物に、一人の人間として生きるマミが左右されても仕方がない。
彼女に必要なのは高みからの視点ではなく、自らの幸福を自分の手で掴み取る意志である。

何はともあれ、現在の悠は巴姓を名乗り、マミの叔父という立ち位置にある。
本来ならここで職でも探すのが正しいのかもしれないが、今の最優先事項はマミの魔女退治への随伴だ。
社会というしがらみに捕らわれては面倒な事になりかねない。
なので、家族間通話無料で基本使用料が低く、新規契約なら本体無料の携帯電話をマミに買ってもらい、平日は中学の授業終了まで図書館で時間を過ごす日々を送っていた。
幻想郷の神秘に基づく技術も悪くは無いのだが、外の日々進歩する物理学を基礎とした技術は非常に面白い。
幻想入り以前は悠の知識に時代が追いついていなかったが、この世界では既に悠の知識を越えた地点に技術が到達している。
外の世界の科学技術と神秘学の融合。
その一端は既に河童達が実践しており、神奈子達がそれを後押しする形を取っている。
しかしそれは、外の技術の思想を幻想の力で再現した物でしかない。
悠が思い描いた妄想にしか過ぎない考えは、前述の物とも月人の技術とも一線を画す物だ。
幻想の中に現実を持ち込むのではない。
幻想の中に在ってなお幻想と評される、異質な技術系統の確立。
すなわち、前人未到の領域への躍進である。
とはいえ、幻想と物理学の融合から生まれる突然変異など、悠の手では生み出せない。
悠はあくまで普通の人間から外れられないからだ。

だが、思索を巡らせる事に意味が無いわけではない。
いや、むしろ意味が無い行為など無い。
それが結果を残す事が出来ず、誰の目から見ても無価値だったとしても。

何かを為すという事、何かを為せる存在である事には必ず意味は在る。

「――――――――」

不意に、細かい砂が流れ落ちる様な声（ノイズ）が聞こえた。
それは形を成さぬ言葉、真っ当な意味を持たない情報に過ぎない。
それは、人の身では到底理解出来ない感情の残滓だ。
ただ、それが誰の想いから生まれた物なのか。
それだけが妙に気になった。

しばし時が過ぎ、もうすぐマミが下校する時間になった。
先日から読み続けていた量子論の本を棚に戻し、図書館を出てマミの家へと足を向ける。
だが、その途中で運悪く生物と遭遇した。
いや、待ち構えていたと言う方が正しいのかもしれない。
なぜならコレはかなりの合理主義者だ。
人間のように時に追われているわけでは無いが、無駄な事にわざわざ時間を割いたりしない。

「やあ、お帰りかい？」
「ああ、いつも通りだよ。だから直接話しかけるな」

肩に乗って囁く生物に小声で毒付く。
マミの手前妥協する事にしてから、露骨に生物がなれなれしい態

度を取る様になった。
この生物、こちらが嫌がっている事を分かっていても、こういった行動を止めようとはしない。
それは感情という物を理解していないためであり、同時に生物にとってこの方が都合が良いためでもある。

「でも、僕の姿は普通の人間には見えない。君にはテレパシーも通じないしね」
「お前、本当に俺を魔法使いに出来るのか？」
「君が心から契約を望むなら可能だよ。君自身がそう言っていたじゃないか」

生物の認識は正しい様で、しかし決定的に間違っている。
魔法係数は才能でしかなく、それがどの様に発現されるかは叶える願いによって決まる。
だから生物は願いを叶えるという形で契約を結ぶ必要性がある。
だが、ここにいる悠が契約を結ぶために必要なのは、互いの同意ではない。
悠は人のカタチを保つために外部からの干渉をシャットダウンしている。
故に、契約の為に必要なのは願いではなく、人から魔法使いへ変化したいという渇望だ。
生物に出来るのは、人という殻を変化させる切欠、あるいは補助に過ぎない。

「それで、願いは決まったかい？」
「結局それか」

このところ、生物は決まってその質問を口にしている。
とはいえ、今の悠には他人に叶えて欲しい願いなどない。

あるのは望みだけ。
それは他人に託す物ではなく、自らの手で成し遂げるべき物なのだ。

「生憎、お前に手伝って欲しい事なんかないよ」

これは既に決定した意志である。
故に、その結果を受け入れる覚悟がある限り、この生物に揺さぶられる事はない。

「君は欲が無いのかい？」
「まさか。天人じゃあるまいし」

ちなみに、博麗神社を倒壊させた天人は例外だ。
普通の天人は欲を捨て去っているため、生への執着すら無い。
地上に現れる肉体を持つ天人の多くは、元が仙人であるためか思考形態が人の枠を踏み外している。
当然、悠にも人並みの欲はある。
だが、悠が魔法使いになるためには、人並みでは到底届かない渇望が必要なのだ。
この生物がそれを理解出来るとは思えないので、語る言葉を省略しているが。

「大抵の子は二つ返事なんだけど」
「それは、そういう状況を選んで声をかけているからじゃないのか？」
「僕から言わせてもらうなら、君が奇跡に頼りたがらないだけだよ」
「ハッ、どうだか」

マミの場合、死に掛けた状態で契約を持ちかけられた。

人間という種を理解していない生物が、自らその状況を作り上げたかどうかまでは判らない。
それでも、子供の視野は狭い。
人生経験を積み上げ視野を広げた人間に比べ、視野が狭い人間には小さな悩みが大きな問題となる。
素質を持った子供が悩みを抱えている状態の時に契約を持ちかけたなら、同意も得やすいだろう。
悩まない人間、迷いのない人間など滅多にいない。
まして、リスクを意識しない子供であれば尚更利用しやすい筈だ。

「大体、願いを曲解するのがお前らの常套手段だろう」
「君は僕達を何だと思っているんだい？」
「悪魔」

質問に簡潔に答える。
しかし、幻想郷の悪魔――主に紅魔館に生息――が、そのような真似をするとは聞いた事がない。
そもそも悪魔は無限の広さを持つと言われる魔界に生息しているため、幻想郷ではまず見ない存在である。
それが幻想郷を愛する妖怪の賢者の意図によるものか、外では願いを曲解する悪魔がまだ現役なのかまでは知らないが。

「残念だけど、僕達は君の言う幻想の存在じゃないよ」
「だろうな。そもそも、お前らは問うまでもなく否(あく)だろう」

魔に誘おうが誘うまいが、そもそもこの生物の存在自体が人と相容れないのである。
尤も、人にとって否定すべき存在であっても、この生物達にとって人は否定対象足りえないのだが。

「……まあ、君の気が変わるのを気長に待つよ。君が傍にいる限り、マミが死ぬ危険性は大幅に下がるしね」
「いつまで続くか分からんけどな」
「マミが望む限りいつまでも続けられるさ。彼女が望むなら、老いる事なく君と生き続けられるだろうね」

もし、マミがそれを望むなら。
言うまでもない。この身は彼女の支えとなった。
故に、こちらからの脱落は許されない。
だが、老いる事のない存在は、この世界では生きにくい。

中学を卒業した彼女がどのような生活を選択するのか、少し想像してみる。
不意に、夜の路地裏で手招きをしている幸薄そうな少女の姿が脳裏をよぎった。
――悪い。イロモノ(そっち)には行きたくないんだ――
頭の中で、知りもしない存在に謝罪を告げる。
残念ながら、この世界はそういう掃き溜(スピンアウト)めに優しく出来ていないのだった。
なぜなら、この世界に神(きのこ)はいないのだから。

――目眩がする。
悪いユメを見ていた様だ。
内容は思い出せない。
思い出せないのなら、どうでもいい内容だったのだろう。

私服に着替えたマミが夕飯の支度を済ませてから、いつも通りの魔女退治に精を出す。
だが、マミの戦闘スタイルは大きく変化していた。
消費（ロス）を抑え、確実にしとめるための戦い方。
それはかつての派手さなどない、殺し合いを継続するための物。
四週間で出くわした魔女は七体。
だが、使い魔との遭遇回数は九回。
人を守るために戦うマミの意志は尊重するが、魔力の無駄は徹底的に省かねばならない。
そして、今夜もまた使い魔と出くわした。
結界は元になった廃屋を反映した構造に、数多くの蔦が這い回っている。
家の奥から現れたのは、三十余りの二足歩行する向日葵。
花の中央には、十字に裂けた口から乱杭歯が覗いている。
「マミ」

「ええ」

マミは一本のリボンを伸ばし、手元の部分を螺旋状に巻いて手渡してくる。

それは、リボンで出来た即席の剣。

加えて彼女はもう一本長いリボンを創造する。

悠は手渡されたリボンの剣を持って向日葵の群れに突っ込む。

向日葵は自在に茎を伸ばし、その凶悪な口で噛み付いて来ようとする。

向かって来た向日葵の花部分を四つ程切り裂いたところで、十を超える花に噛み付かれた。

痛みなど無い。

もとより歯に加えられた力は悠に触れた瞬間に消滅している。

次の瞬間、動きが止まった向日葵達の伸ばした茎部分が一斉に断ち切られた。

マミの振るった、リボンという切断の鞭によって。

念のため、床に落ちた向日葵の花を全て切り裂いて止めを刺す。

その間に残った使い魔が再び襲い来るが、やはり悠に触れた瞬間に静止し、再びマミによって伸びた茎を切り裂かれた。

全ての花が床に落ちると同時、景色が揺らいで結界が消える。

使い魔は結界と共に跡形もなく消滅し、廃屋の中には窓から入る月光に照らされた三つの人影があった。

「よう、マミ」

結界に突入する前には居なかった筈の赤毛の少女が、気安げにマミへと話しかける。

「あら、どうしたの？　杏子」

対するマミも特にこれ以上警戒する様子はない。
なぜなら、未だその手には長いリボンが握られてる。
臨戦態勢は継続されているという事だ。
そしてその余裕を保っている最大の理由は、言葉通り無敵の盾である悠の存在に他ならない。

「いや、面白い情報を聞いたんで来たのさ。何でも、あのマミに男が出来たってな」
「え？」
「は？」

杏子、と呼ばれた少女の言葉に二人して呆けたような声を上げる。
それから同時に互いの顔を見合わせて――

「ないわね」
「いや、それはない」

――何の躊躇いもなく、その戯言を一蹴した。
互いに好意は抱いているが、それは男女の愛情とは程遠いものである。
少なくとも、悠の方には浮気をする積もりなど全く無い。

「そうなんだ。まあ、見てた限りそっちの男もマトモじゃねえみたいだけど」
「まあな。で、そろそろ名乗り合わねえか？　それとも、アンタは殺し合いの前に余分な事は聞かねえタイプ？」
「は！？　ちょ、ちょっと待て！　何で殺し合いになるんだよ！？」

何で、と聞かれて悠も困る。
少女の瞳に剣呑な光が宿っていたから、てっきりグリーフシードの奪い合いかと期待していたのだ。
殺さずに相手を無力化するという一点において、悠に勝る存在はいない。
だから、生意気そうな少女が無様に負ける様を見たかっただけだと話すと、露骨に嫌そうな顔をされた。

「やり合う気はねーよ。こっちだって魔女をしとめてから来たんだ」
「あら、なら本当に興味本位？」
「そうだよ。しっかし、意外だねー。お前がそんな凶悪なヤツとつるんでるなんてさ」

その言葉にマミと再び視線を合わせ、同時に小さく噴き出す。
実は、この一ヶ月余りで彼女から悠への信用は既に地に墜ちていたりする。
むしろ彼女は、魔女の結界内でだけ会える悠の影との方を信用している。
悠の影は、外見はともかく中身は誠実かつ紳士的で、悠の言動の意味をきちんと解説してくれるらしい。

「まあ、貴女も彼と長く付き合ってみれば、色々と変われるんじゃない？」
「うげ」

楽しそうに告げるマミと、苦い顔をする杏子と呼ばれた少女。
赤毛の少女はマミと悠の顔を見比べて憂鬱そうなため息を漏らす。

「変わりすぎだろ、オイ」

「あら、ありがとう」
「褒めてねーよ……」
嬉しそうに微笑むマミに、赤毛の少女は疲れ切った声で答えを返す。
マミの変貌振りに色々と驚いたのだろうが、実は悠も同じ思いを抱いた事がある。
彼女は依存心が強く、予想していたよりも悠の甘言へ染まりやす過ぎた。
さらに、悠の影による仲介がそれを加速させたのも大きい。
「とりあえず、自己紹介と行こうか」
「あ、ああ。ったく、調子狂いっぱなしだぜ」
「俺は悠。固定された人のカタチ。今は『巴　悠』と名乗ってる」
「あたしは佐倉杏子。見ての通り魔法少女さ」
ようやく調子を取り戻した少女――杏子と笑みを交わす。
口の端を吊り上げた、悪意を含んだ笑みを。
「それで、お前にデマを流したのは誰だ？　まあ、想像はつくが」
「ん？　あの白いのだよ」
「やっぱりか」
アレは痛覚神経を、危機管理のための機構の一つとしてしか捉えていないので、痛めつけても効果が無い。
リベンジは無意味と切り捨て、取りあえず事態を把握する事に思考を回す。
二人の仲を男女の交際だと勘違いしたのは杏子だろうが、あの生物が端的にしか情報を喋らないのが最大の原因だろう。
情報を手に入れた杏子がこうして様子を見に来た事から察するに、

彼女は普段からそれなりにマミと交流を持っている様だ。
「さて、詳しい話をしたいなら、私の家で話をする？」
「……悪いもんでも食ったか？　あたしらはそんな仲じゃなかっただろ？」
「来るなら、晩御飯とケーキをご馳走するわ」
「いいぜ、早く行こう」

いぶかしむ様子から一転、即座にマミの提案に応じる杏子。
おそらくではあるが、マミの言葉には杏子のルールに抵触する何かがあった様だ。
それに、マミは無闇と他人を傷つけない。
それは、出会った頃も今も変わらない。
彼女の人となりを多少は知っているからこそ、杏子もその誘いにわざわざ乗ったのだろう。

そして、マミの家にて。
「ふーん。要はそいつに洗脳された、と」
「そういう事よ」
「いや、言い方が酷くねえか？」
杏子の言葉にそのまま同意するマミ。
あまりの言われ様に思わずぶっきらぼうな言い方で返す。
「あのな。筋金入りのお人好しだったマミをここまで変えたんだ。洗脳で充分だっての」
「お人好し、ねぇ……」

杏子の言葉に視線をマミに向けると、フイ、と顔を逸らされた。
流石に自分で訂正する勇気はない様なので、代わりに彼女の変わった理由を説明する。

「マミには自分のために戦っているって事を自覚させただけだ」
「は？　自分のため？」

目を丸くする杏子。
彼女も思い違いをしているらしい。

「当たり前だろ。人間の行動は全て自分のために行なわれる。もし、本当に他人のため行動出来てしまう人間がいたら――――そいつはもう、精神（こころ）が人間じゃない」
「――は。じゃあ、何だ。マミが人を守ってたのも自分のためだったってのか」

杏子の顔は笑っている。
笑いながら、その裏で大きな怒りを渦巻かせている。
彼女は、彼女なりにマミの行動を認めていたのだろう。
だから、こうして彼女の今までを否定した悠に怒りを抱いている。

「人間の行動の原点は感情にある。助けたいから助ける。殺したいから殺す。それを誤魔化さないなら別に良いさ。殺す事に理由を付けるのは殺す罪への言い訳だ。そして、助ける事に理由を付けるなら――それは、助けない事への言い訳に過ぎない」
「……助けない、言い訳？」

呆然とかけられた言葉を反芻する杏子。
そこに、さらなる毒（ことば）を落としてやる。

「別に、魔法は魔女を倒すためにしか使えないわけじゃない。魔法で暴力や事故から人を守る事も、傷を癒す事も出来るだろうさ。助ける事に理由（ルール）を決めるって事は、その規則（ルール）から零れ落ちた者を見捨てる言い訳を作るって事だ」

嗤（わら）いながら騙（かた）るこちらに、睨みつつも反論しない杏子。

彼女も彼女なりに理解している部分があったのだろう。

だが、それを認める事は、自分の闇を直視する事に他ならない。

助ける術（すべ）を持ちながら助けない事を選択したという事実は、常人が背負うには重すぎる。

まして、彼女は屈折しているフリをしているが、その根はあまりに真っ直ぐ過ぎだ。

だから、彼女は悠の言葉を肯定する事も出来ないまま、ただこちらを睨み続けるしかない。

「てい！」

不意に、頭に小さな衝撃が走る。

見れば、マミが悠の頭にチョップを決めていた。

「まったく、どうして貴方はそういう言い方しか出来ないの？」

「仕方がないだろ。こういうカタチに成ったのは俺のせいじゃない」

呆れた様に文句を突きつけるマミに言い訳をする。

その有様を、杏子は目を丸くして呆然と見つめていた。

「杏子。私が人を助けていたのは、引け目を感じていたからなの」

「……引け目？」

杏子の呟きにマミは頷いて答える。
そこには、簡単には揺らがない芯(つよさ)が存在していた。

「私は奇跡で命を繋いだ。その代わりに魔女との戦いを受け入れた。だから、魔女や使い魔から人を見殺しにしたら、私はその負い目に耐えられない。それが私の人を助けていた理由。怖くても戦った。独りで泣いて、戦い続けた。こうして思い返してみると、弱過ぎたのね。昔の私は」
「……じゃあ、今は違うのか？　今夜は何の為に使い魔なんか倒してたんだよ」

責める様な、それでいて縋る様な声で問う杏子。
それに対し、マミは柔らかな笑みを浮かべて答える。

「私は、助けられる人を見捨てた罪なんて背負いたくない。それじゃあ、私は幸せになれない。私は生きて幸せになりたい。報われたい。私にしか出来ない事をやって、それを認めて欲しい。理由は一つじゃないわ。でも、もう誤魔化さない。私は自分のために戦う。そう決めたの」
「誰が……誰が認めてくれるって言うんだ！　誰かのために魔法を使って、それで皆幸せになれるって思ってるのかよ！？」
「いいえ。そんな事、思うわけないじゃない」

激昂する杏子に対し、マミはあくまで笑みを崩さない。
独りであるままの者と、独りではない者ではここまで差が出る。
もとより人は一人で生きられない生き物だ。
独りのままで揺らがぬ孤高の者は、代わりに誰とも繋がれない。
もう変わる事が出来ない。
それは、一見強い様で、どうしようもなく弱い。
その意味においては、杏子はまだ変わる事が出来る。強く在る事

が出来る。
そのために、マミは今杏子と繋がろうとしているのだ。
「私は魔法を使って人を助けて幸せになる。だけど、助けられた人が幸せになれるかどうかはその人次第。だって、そうでしょう？その人の幸せと私の幸せはカタチが違うもの。人に押し付けられた幸せなんて、カタチが合わないと苦しいだけよ」
「……」
杏子は何も言わない。
何も言えないまま、ただマミを睨み続けている。
相対するマミは、そこでようやく表情を変えた。
ただし、困った様な笑みに、だが。
「今の私は独りじゃない。死ぬのは怖いけど、もう戦いには怯えない。私の頑張りを認めてくれる人がいる。人を助けた事を褒めてくれる人がいる。私は、私なりの幸せを見つけたの」
「――それが、ソイツってわけか」
杏子が鋭い視線を悠に向け、マミは静かに頷く。
杏子から向けられる敵意に、思わず口が笑みの形に歪んだ。
「まあ、悩みや文句や恨み言があったらいつでも言いに来い。これでも千年は軽く生きてるんだ。聞くだけ聞いてから嗤(わら)ってやる」
「――――マミ。お前、本当に大丈夫か？」
「……まあ、魔女の結界の中限定でなら頼りになる事を言うわ。普段の態度は悪いけど、真面目に話す内容は為になるし。それに、永く生きてるのも人類を愛しているのも本当らしいわよ」
誠意を込めて親切からの言葉を贈ると、杏子には途端に変な物を

見るかの様に蔑んだ視線を送り返され、マミは残念なモノを見るかの様に憐れみの視線を送ってきた。
ちなみに、悠はマミの信頼を得ていく過程で信用を大幅に失っているので、真面目ではない時の扱われ方が日々雑になりつつある。
影の方が大きな信用を勝ち取っているので、問題はまだ発生していないが。
大げさにため息を吐き、肩をすくめて見せてから口を開く。

「ま、人の移り変わり、生き死にを眺めてきたのは本当だ。それなりに為になる事は教えてやれるだろうよ」
「はん。――――それじゃあ聞くけどよ。誰かの為に奇跡を願うのは正しいのか？」
「当たり前だろう？」

挑発するような杏子の問いを瞬時に笑い飛ばした。
即座に返された答えに彼女が目を丸くしている内に話を続ける。

「奇跡が誰に作用するかなんてのは問題じゃない。その祈りが自分の中から生まれた物なら、結果はどうあれ俺はそれを肯定する。善か悪かは過去に対する評価であって、今を生きる俺達に現在の是非は判断出来ない。俺にとって、貴ぶべきは人の意思や在り方だ。たとえ奇跡の結末が不幸でも――そこに込められた祈りは否定されてはならない」

願いに貴賤はなく、世界の慈悲は人の幸福に繋がらない。
ただ、その中でなお前に進み続ける意志こそが、最も眩しく映った。
それ故の結論だ、と締めくくる。
杏子から返されたのは、信じられない物を見たかのような唖然と驚愕の表情。

だが、すぐにその顔は、敵意を交えた強気の笑みへと変わる。
「ああ、やっぱりテメーは気に入らねえ」
「なら、時々喧嘩を売りに来い。喜んで買ってやるよ」
「上等！」
こちらも悪意を込めた笑みと言葉で返すと、杏子は握った手の親指を下に向けて見せる。
その様子を、マミはただ楽しそうに眺めていた。

「ところで杏子。今夜はここに泊まらない？」
「風呂使わせてくれるならな。アイツ覗いたりしないよう見張ってくれよ」
他愛の無い口喧嘩の末、疲れた様子の杏子にそうマミが切り出す。
経緯は知らないが、杏子もマミと同じく家族はもういないらしい。
マミの目的は親睦を深める事だろうか。
何にせよ、心に余裕が生まれているのは良い事だ。

「ああ、その心配は無いから一緒に入りましょう？」
「あん？　心配がないってどういう事だ？」

マミの自信に溢れた答えに杏子が怪訝な顔をする。
だが、確かに悠には性欲に限らず三大欲求全てが欠けている。
生存の為に必要ではないせいだろう。
食べず、眠らずとも支障が無い身体。
加えて、悠の内に在る高次の理のせいで、子供を作ることは許されない。
だが、マミが杏子を説得するのに用いた根拠は、非常に簡潔かつ大きな問題を含んでいた。

「あの人、添い寝してもらっても何もしてこないからね」
「死ね！　変態！！　蛆虫！！　掃き溜めへ消えろ！！」

繰り出される槍は身体に一切の影響を与えられないが、彼女の語彙が尽きるまで浴びせられた罵声は悠の精神（こころ）を酷く抉る。
その間、全く笑みを崩す事のなかったマミは、二人が打ち解けられる様に善意から発言したのだと後に証言した。
なお、この事件は三ヶ月近く後を引く事になる。

第七話　そしてまた一人運命が捻じ曲がる（前書き）

作者秘奥義：妄想具現化（オートマティスム）

特徴１：妄想を垂れ流しにして文章を作る。

特徴２：短時間作成を可能に。

特徴３：文量が少ない。

特徴４：使うと死ぬ（作者が）。

第七話　そしてまた一人運命が捻じ曲がる

杏子との邂逅から三日。
あの使い魔を生み出した魔女を見つけ、難なく倒す事に成功する。
てっきり使い魔から花が好きな魔女かと思いきや、その本体は太陽をモチーフとした燃える球体だった。
名付けるなら太陽の魔女と言ったところか。
多分、幻想郷の花妖怪の方が十数倍恐ろしいだろう。
地底の人口太陽は言わずもがな。
何はともあれ、魔女(たいよう)を崇める向日葵の使い魔を悠が引き受けている間にマミが大砲で一撃。
しかも、撃った弾は炸裂弾。、
当然ながら、魔女は前半分が弾け飛んで死亡した。

そして戻ってきた二人を、マミの家の扉の前で待ち受けていたのが杏子である。

「よう、お帰り」

そしてこちらを見つけるなり、シニカルな笑みで挨拶してくる。
その手には一つの大きめなバッグ。また泊まる積もりらしい。

「ええ、ただいま」
「早速来たのかよ」

大して動揺していない様に見えるマミと、内心驚く悠。

正直、この短期間で再び来るとは思っていなかったのだ。
取りあえず家に入り話を聞くと、今日も魔女を倒したから今夜は大丈夫だろうと判断してやって来たらしい。
元々、マミの暮らすこの近辺が魔女の出やすい地域というだけで、杏子の居る町ではここ程魔女は出ないそうだ。
マミの家に来たのは主に飯を集(たか)りに来たのと風呂を借りるため。
面倒だけど普段なら見逃すはぐれた使い魔も倒してきた、と発言した杏子に、マミは喜んで彼女の要求を受け入れた。

そして夕食の間、杏子の今の暮らしを聞く。
遺産などで資金的な余裕や住居が有るマミと違い、杏子は家も貯蓄も無いと言う。
その為、非合法な方法で金を手に入れ、寝床はホテルを泊まり歩き、風呂はこっそり銭湯に忍び込んでいるらしい。
ついでに学校にも行っていないそうだが、闇に身を置く者としてはその方がむしろ正しい在り方だ。
立場、年齢的にも就業が難しく、魔女と戦うという点からも時間を制限を受けるのは好ましくない以上、合法的に生活するのは難しいだろう。
マミが中学に通っているのも、日常への執着という面が大きい。
話が終わり、食後のクッキーと紅茶を頂きながら感想を告げる。

「なんだ。やっぱりお前善人じゃん」
「ブッ！？」
「キャッ！？」

その言葉に杏子が紅茶を噴き、口付けていたカップから飛沫がマミに散る。
マミは迷惑そうにジト目で杏子を見るが、その視線に気付かない杏子は顔を真っ赤にして悠を睨み付ける。

「あ、あたしのどこが善人なんだよっ！？」
「んーと、暮らし方？」

金を手に入れるといっても、せいぜいＡＴＭ強盗で銀行に損害を出している程度。
空き巣や万引きなども大き過ぎる被害は出していない。
風呂に至っては無断借用と迷惑のかかりにくい方法を選んでいる辺り、金に関しては自分にルールを設けている様に感じる。

「でも、あたしは使い魔を見逃してきたんだぞ！？」
「だけど、お前は目の前でただの人間を見殺しには出来ないだろ」

そう断定すると、杏子は声を詰まらせる。
彼女は確かに使い魔を見逃してきたが、それはあくまで消極的な対処をしていただけの事。
自分の知らない所で人が死ぬ分には平気だろうが、目の前で殺される人間を平然と見捨てられる程彼女は踏み外していない。
ちなみに、魔法少女（どうるい）は別だろう。
彼女は魔法少女となった自分自身を嫌っている様だ。
そのため、同属嫌悪とでも言うか、自分を含めて魔法少女が死ぬのは自業自得と捉えている節がある。

「大体、魔法で好き勝手してるって言う割には、やってることが小さいというか可愛過ぎるだろ。なあ」

視線で話をマミに振る。
彼女も小さく頷いて同意を示した。

「そうね。悪い事をしているのは確かだけれど、悪党っていうのは

もっとおぞましいモノだから」
「まあ、銃持ったヤーさんの肘を撃ち抜くマミもマミだけどな」
「だって、放っては置けないでしょう？」

魔女――人の絶望や呪いから生まれた存在――と戦う以上、魔法少女は人の負の側面を垣間見る事になりやすい。
魔女を探していれば、その過程で暴力を始めとする人の悪意を目の当たりにする事もままある。
ましてや、この町には銃器を持つヤクザまでいるのだ。
ちなみに、マミが助けたのは銃を向けられていた相手ではない。
銃を持っていたヤクザらしき男の方を、殺意剥き出しの悠から守ったのだ。
肘関節をあれだけ見事に撃ち抜かれては、もうあの腕は使い物にならないだろうが。

ちなみに、この町と比べても幻想郷は圧倒的に危険な世界である。
安全地帯に居ても妖精には物を盗まれ、悪戯や事故を起こされる。
一応の安全圏である人里にも、人喰いや人殺しを厭わない妖怪が買い物に訪れる事もあるのだ。
幻想郷の人間は対応の仕方を知っているから大丈夫だが、現代人にとっては物騒で理不尽な世界に映るだろう。
普通に死が身近な世界に居た悠に、マミは既に感化されていた。

「ったく、変わりすぎだろ」
「羨ましいなら、お前もとっとと変わったらどうだ？」
「――あん？」

マミを見て小さくため息を吐く杏子に、くつくつと嗤(わら)いながらそう声をかける。
それに対し、杏子は本気の殺意を込めた視線で応じた。

それがたまらなく滑稽で、さらに口端が歪む。

「今の自分が嫌なら、マシになろうとすればいい。お前は自分がどんな生き方をしたいか、正しく認識している。今はまだ、少し素直になり始めたばかりだろう」

だが、悠の口から漏れたのはあからさまな怨気を孕んだ言葉だった。

こちらの嫉妬と憤怒に気圧されたかのように杏子が息を呑み――――同等の殺意を持って睨み返してくる。

「……テメェに何が判る」

「判るさ」

返された殺意にニヤつきながら、しかし口から出したのは精一杯の羨望と賞賛を込めた短い声。

唐突に向けられた悪意が消えた事に、上から見下ろされる立ち位置から下から見上げられる立ち位置への急激な変化に、杏子から剣呑さが消え失せ戸惑う様子が窺える。

「使い魔を倒したと言った時のお前が、どれだけ誇らしそうに見えたと思ってやがる。この間会った時よりよっぽど良い面(ツラ)しやがって」

そして紡がれる嫉妬と羨望に満ちた言葉。

目の前の少女の変化を妬みながらも褒め称える。

「人が前に進めるのは意志の力だ。希望が消えようと、絶望に塗れようと、意思を捨てない限り人は前に進める。それがどれだけ無様でも、例え結果を残せなくても――――そうやって足掻く事には意味が在る」

在りたい用に在る。
生きたい様に生きる。
それが出来ない身であるからこそ――その姿が眩しいと騙(かた)る。
その言葉に込められた膨大な感情に、目の前の二人はしばし呆然としていた。
先に我に返ったのは杏子。
その顔がやや強張りを残しつつ嘲笑の形に変わる。

「――はっ。偉そうに言っといて、結局自分が出来てねえじゃんか」
「ああ。もう俺は変われない。変わる余地なんてモノは残されてない。俺は与えられたカタチのまま在り続ける。それは、どんな魔法(キセキ)であれ覆せない」

杏子に告げられた言葉をただ肯定する。
その声には諦観すら存在しない。
そんなものはとっくに通り過ぎている。
いつか全てが終わる刻までただ在り続けるのだと、遠い昔に識ってしまった。
その返答に、今度こそ杏子は完全に沈黙する。
彼女がその答えに何を思ったのかは分からない。
ただ、こちらとあちらの間にはどうしようもない隔たりがある事は感じ取れたのではないだろうか。

「……ねえ、悠」
「なんだ？」

そして、それまで口を開かなかったマミが悠の名を呼ぶ。
その瞳には、今までになく強い意志が宿っていた。

「じゃあ、貴方に望みは無いの？」

その言葉に、一瞬思考が揺らいだ。

不意に、自分の奥深くのナニカが脈打つ。

「――――あるよ。俺は自分の望みを叶えるために行動している。だけど、その望みもこのカタチになって生まれた物だ。元々の望みは、元になった存在と共に亡(な)くなった」

ただ、今知る限りの答えを告げる。

その返答に、しかしマミは柔らかな笑みを浮かべて小さく頷いた。

「じゃあ、結局貴方は貴方のままなのね」

「良くも悪くも、な」

「ならいいわ」

何がいいのか分からないが、どの道その答えは彼女だけの物だ。

野暮な事を言う必要はないだろう。

ないのだが、そろそろ十時前だ。言わなければならない事もある。

「ところで、来週は試験だって言ってなかったか？」

「あっ！」

マミはこれだけ魔女退治に時間を割いていても、割と成績は良い方である。

というのも、魔法少女になってから肉体面には余裕が出来たらしく、多少の夜更かしは平気であるのが理由の一つ。

もう一つは、悠と出会う前までは勉強(にちじょう)で認められる事で自分を支えてきた事にある。

尤も、今では現在(いま)だけの日常を目一杯楽しむために、学園生活を

楽しんでいる様だ。
楽しむ余裕が生まれたのは良い事だろう。
なんにせよ、話が真面目過ぎて時間を忘れていた事に彼女も気付いたらしい。

「じゃあ、すぐお風呂入れてくるわね」
「おう」

マミは風呂場の方に行き、ダイニングには悠と杏子の二人が残された。
杏子は暫くの沈黙の後、大きく首を振って悠に鋭い視線を向ける。
そこにあったのは強い意志。
彼女も、彼女なりの結論（こたえ）を出した様だ。

「あー、もうウジウジ悩むのは止めだ！」
「吹っ切れたか？」
「知るかよ。まずは行動してから全部決める。どう生きるかなんて、頭で考えても上手く行きそうにねーからな」

そう言い放った杏子の不敵な笑みは、しかし今までとは全く印象が違っていた。
憑き物が落ちた様に晴れやかで、同時に胆力をも見せ付けている。
結果を受け入れるだけの腹が据わった、と言ったところか。

「それがいい。信念は言葉で表現出来ない。どうせ言語化した段階で劣化、矛盾が起きる。表現するとしたら、生き様でしか語れないモノなんだから」
「へっ。そうやって羨みながらじっと眺めてろ」
「言われなくても。元からそういう存在でしかないからな、俺は」

普段の勝気な調子を取り戻した杏子に笑い返す。
ただただ、彼女がその眩しさを手にした事が嬉しかった。
だが、途端に彼女の表情が訝しげな物に変わる。

「どうした？　いきなり毒気を抜かれた様な顔をして」
「そりゃこっちの台詞だ。アンタ、何でそんな風に笑うのさ」

質問してみると、同じ質問で返された。
しかし、こちらは特に変わった積もりはない。
あるとしたら、それは――

「――お前に対しての苛立ちが消えたから、かな」
「ああ、笑顔に悪意が無いから変だと思った――――ってコラ。何であたしに苛立ってるんだよ」
「そりゃ、お前が自分の幸せのために生きていなかったからだ」

底意地の悪そうな声で返すと不機嫌な声で文句を付けられた。
なので、今度は真面目に言い返す。

「生きている事はそれだけで尊い。何かを為せる以上、生きている事に意味は在る。まあ、世界にとっての意味なんて、人間には理解出来ないモノなんだが」
「はいはい、そーですか」

諦めたのか、理解を放棄したのか、適当な返事をして杏子は最後のクッキーを口に運ぶ。
ちなみに、人間が他人に見出すのは価値である。
それは相対的な物であって絶対ではない。
逆に、誰にとっても無価値である存在にさえ意味は在る。
それは世界にとっての必要性。人の身では判らぬ、あらゆる存在

に与えられたその存在の肯定だ。
ただ、この世界で為しえた事が残るなら、この身の自分にとっての価値とは――

「杏子、一緒に入りましょう？」
「おう。セイッ！」

風呂場から戻ってきたマミが杏子に声をかけ、返事をした杏子が手を振るうと同時、その手からトランプのダイヤを直列した様な鎖が悠をぐるぐる巻きに縛る。

「おい、またかよ！」
「うっせー。さえない変態はそこで転がってろ」

そう言い放つと、杏子は着替えを持って風呂場の方に行く。
マミも苦笑はするものの、助ける事なく杏子の後を追う。

「さえないさえないって、自覚ある分響くなあコンチクショー……」

幻想郷の食べられない人間の筆頭である悠も、外見評価が悪いのは割と気にしていたりする。
悠から言えば、幻想郷に整った顔立ちの美人が多いだけで、人里の男衆では水準だと自負しているのだが。

なお、女性の風呂は長い。
悠がようやく鎖を解かれたのは、約四十分後の事であった。

第七話　そしてまた一人運命が捻じ曲がる（後書き）

キュゥべえ出さないだけで話の展開がスムーズ。
でも本編（ほむら逆行）まで時間が余り過ぎ。
いや、話をシリアルにするために必要なんだけど。

第八話　新たなる一歩（前書き）

原作キャラ魔改造計画進行中。

第八話　新たなる一歩

本来、自分は見るだけの存在だった。
人の営みを。
誕生と死を。
繁栄と衰退を。
為し得る事など何も無く。
全てをただ眺め続ける。

いつからだろうか。
自分が視られているのだと気付いたのは。
ソレは、自分を視ていた。
自分を通して、全てを視ていた。

いや、それは最初からだったのだ。
ソレが自分とであった時、こちらがソレを感知する前に、ソレは既に自分を見つけていた。
視られている。
一対の目なのか一つ目か、それとも無数の目を持つのかそもそも目という感覚器が有るかどうかも分からない相手。
だというのに、視られているという事実だけを感じ取る。
自分は傍観者であり、ソレは観測者。
なぜ、ただ見ているだけの自分にソレが目をつけたのかは分からない。
しかし、ソレの存在によって、決して有り得ない筈の可能性が提示された。
迷いは無い。
元より思考するだけの脳が無い。

故に、そこに意思疎通の手間など無く、互いが求めるモノを相手から手に入れようと干渉し合い――――こうして自分は生誕の時を迎えた。

さあ、今日もまた見に行こう。
たとえこの身が本来の在り方からは在り得ない程歪んでいても。
こうして在る事は、他と比する事が出来ない程尊いのだから。

杏子との邂逅から二ヶ月ばかりの時が経った。
マミもリボンの扱いに習熟し、マスケット銃との連携も上出来といえるレベルに達している。
銃弾の種類もイメージの切り替えを瞬時に出来る様になり、現在は特殊な銃弾を思索中らしい。

一方の杏子も、週一から二回の割合でマミの家に泊まりに来ている。
生活環境の問題上、彼女が強盗や空き巣、万引きといった犯罪をするのは仕方がない。
魔法少女という特殊な身の上である以上、マミも含めた彼女達は社会と適合する事が難しいのだ。
それでも、今の杏子は魔女から離れた使い魔を退治したり生活のための犯罪を最小限で済ませるなど、スタンスを大きく変えたようだ。
そのせいか、最近の杏子は常に物を食べている事を止め、シニカルな笑みの代わりに年相応の笑みを見せる様にさえなった。

自分の在り方を見直し、前を向いて歩き出した二人。
それぞれ自分の本音を見つめ直した二人は大いに打ち解けた。
それこそ、杏子が泊まりに来た日には女子二人で一緒に寝るぐらいに。

同時に、悠と杏子の関係もやや変化した。
それは、打ち解けたと言うより、杏子が悠の性質を把握し立ち位

置が安定化したと言った方が適切だろう。
だが――――

「なんでこうなってるんだ？」
「いーじゃん、別に」
「そうそう」

ダイニングの床に毛布を引いて仰向けになっている悠。
その腹や胸にマミと杏子が頭を乗せて寝転んでいた。
全員風呂上りのパジャマ姿なのだが、色気といったモノは全く感じられない。
それはおそらく、互いに異性として意識していない事が原因だろうが。

「おいマミ。また胸大きくなったんじゃねえか？」
「そうなのよ。だから可愛い下着が中々無くて」

色気付いてない分色香を振りまいてはいないが、マミの身体はより女性的に成長している。
寝巻姿で下着を着けていない分、それは顕著に見て取れる。

「ちょっと待て。それは仮にも男の前でする話じゃないだろ」

人の上でガールズトークを繰り広げる二人に物申す。
裏側に身を置く存在である以上、一般人の友人を持つ事は難しく、この二人が仲良くなるのは自然な事だ。
だが、恥じらいや慎みは持ってしかるべきだろう。
人と違う生を歩むとはいえ、それをも受け入れてくれる相手に巡り会える可能性とて有るのだから。

「あら、恥ずかしいの？　お・に・い・ちゃ・ん？」
「どっちかって言うと、今のお前の言動が一番恥ずかしい。というか痛い」

腹の上からパジャマ越しに胸を押し付けてからかってくるマミを一蹴。
つまらなそうに頬を膨らませる彼女の頭を撫でてやると、額や耳を弄られる猫の様に気持ち良さそうな笑みを浮かべる。

「で、だ。どういう心境の変化だよ、杏子」
「んー、そうだな。あたしには兄なんていなかったからさ、いたらどんな感じだったんだろうなって」

そう言いながら杏子は悠の胸に頬を擦りつけたり手で何度も感触を確かめるように触ってくる。
話をするために枕を高くしてマミの顔を何とか視界に収められるようにしているが、杏子は後ろ頭しか見えないので感情を察する事は出来ない。

「ん……。やっぱり親父とは違うな」
「そうかい……」

感慨深げに呟く杏子。
いい加減首が痛くなってきたので枕を一つ抜いて、天井を視界に収めながら空いている方の手で杏子の頭を撫でる。

「はっ。お兄ちゃん、ねえ……」

一人呟く杏子の声は幾つもの感情がごちゃ混ぜになっており、なにを思っているか察する事は出来ない。

かける言葉も見つからず、悠はただ二人の頭を撫で続ける。

ややあって、三人の体勢は変わっていた。
悠が座って両足を大きく開いて座り、その足の間で太腿に二人の少女が頭を乗せて顔を向け合っている。
杏子が何か言いたげにこちらへ何度か視線を送ってくるのだが、しかしなかなか踏ん切りがつかないようだ。
その杏子の頭をマミが撫で、ようやく気を落ち着かせた杏子が静かに口を開く。

「なあ、聞いてくれるか」
「おう」

いつも通りの表情で彼女が紡いだのは真摯な想いの篭った言葉。
とりあえずこちらもいつも通りに軽い調子で応じた。

「あたしの親父はさ、教会を任せられる程の聖職者だったんだ」

小さく微笑みながら杏子が思い出を語る。
だが、その口調は苦味を押し殺しているのかひどく平淡だった。

「正直すぎて、優しすぎる人だった。新聞を読むたびに涙を浮かべて、どうして世の中が良くならないのか真剣に悩んでるような人でさ。アンタとは絶対に相容れないタイプだね」

そういって形だけのシニカルな笑みを浮かべる杏子。
だが、その顔にはいつもの覇気がどこにも無い。

しかし、たしかにそれは相容れないだろう。
悠の側はともかく、そのような人物が人の悪、不幸をも肯定する悠を受け入れられるとは到底思えない。

「新しい時代を救うには新しい信仰が必要だ。それが親父の言い分で、ある時親父は教義にない事まで信者に説教するようになった」

もし杏子の父親が資質の有る人間だったなら話は別だったろう。
新たな信仰には新たな神が宿る。
それが信仰によって力を得た亡霊か、既に在る神の新たな側面を切り出したモノかは分からないが。
そこまで考えて、悠はその無駄な思考を止める。
この世界において神は実在しない。
ならば信仰によって人が救われるという事も無いだろう。
神が存在しないなら、どれ程強い信仰を抱いていても神徳は得られない。結局人を救うのは信仰ではなく、人の手と心でしかないのがこの世界だ。

「……当然、信者の足はぱったり途絶え、本部からも破門された。かくして、あたし達は一家揃って食うにも事欠く有様になっちまったわけだ」

だが、そのことに不満は無いのか、杏子のどこか遠くを見る表情は暗くない。
戻らない過去を懐かしむその安らかな表情が、しかし一転あまりに儚い笑みに変わる。

「あの頃のあたしはさ、親父の言う事は間違っていないって信じてた。だから、誰も真面目に取り合ってくれないのが、誰もあの人の事を解ってくれないのが、悔しくて我慢できなかった」

「……貴女は、お父さんの事が大好きだったのね」
「ああ」
自嘲の言葉を連ねる杏子の頬にマミがそっと手を当てる。
対して、杏子はただ小さく頷いて笑みを零した。
「だから――――あたしはキュゥべえに頼んだ。皆が親父の話を真面目に聞いてくれますようにって」
それが、彼女の望んだ奇跡。
そして、今まで彼女を苦しめ続けてきた罪過。
「次の日から怖いくらいの勢いで信者は増えて、あたしは晴れて魔法少女の仲間入り。親父の説法とあたしの魔女退治、表と裏からこの世界を救うんだって馬鹿みたいに意気込んでた」
そこまで話した杏子は一端口をつぐみ、上目遣いでこちらを見上げてくる。
どこか怯えの混じったその視線にいつもの歪んだ笑みを見せ、その頭にそっと手を乗せてやった。
それで安心できたのか、彼女は一つ息を吐くと再び思い出を紡ぎ始める。
「でも、ある時カラクリがばれた」
辛くないわけではないのだろう。
それでもこうして過去を吹っ切ろうとしている彼女の手を、相対して寝転ぶマミが両手で包み込む。
「信者が魔法の力で集まったって知った時、親父はブチ切れたよ。

あたしの事を、人の心を惑わす魔女だって罵った」

まあ、魔法で人の心を惑わしていたのは事実なんだけどな、と自嘲気味に呟く杏子。

その表情に後悔はあれど、恨み辛みは無い。

取り返すことの出来ない過去を、今の彼女は慈しむ様に眺めている。

「それで、親父は壊れちまった。酒に溺れて頭がイカれて、最後はあたし一人を置き去りに家族で無理心中。結局、あたしの願った奇跡が家族を壊しちまったんだ」

そう言って、杏子は長い息を吐いた。

自分で背負った己が罪の告白。

これは許しを求める懺悔ではなく、自らの罪をもう一度見つめ直し、そして前を向くための確認作業。

そして、これから彼女が前に進むために、悠とマミが自分を受け入れて支えてくれるかを試しているのだ。

「なあ、悠。誰かのために祈るのは間違いか？」

「まさか。その想いには確かな価値がある」

いつも通りの口調で弱々しい心を隠した杏子の問いに即答する。

「間違いがあるとしたら、誰かに願いを託した事だな」

「キュゥべえ（アイツ）の事か？」

「まさか。誰かに頼るのはいい。だが、相手が誰であれ、自分の願いを預けてしまうのはいただけない。その祈りが誰のためか、なんていうのはは問題じゃないのさ」

ハッピーエンドを掴むのは自分の手で。
誰かに与えられた幸福は維持するのが難しい。
願いが叶えられるプロセスに自分が関与していない以上、望んだ通りの結末を迎えられないのは当たり前だ。
昔から誰かに願いを叶えてもらう逸話は数多くあるが、大抵はバッドエンドと相場が決まっている。

「叶う叶わないに関わらず、望みを遂げるのは人の手で行われるべきだ。人の手によらない奇跡は、人の条理にそぐわない事もある。家族の幸福を願ったオマエの祈りは間違いじゃない。単にオマエは叶え方を知らなかっただけだ。まあ、無知な子供にそんな取引を持ちかけるあの生物（ナマモノ）に目を付けられたのが、オマエの最大の不幸だったわけだが」

あの生物に奇跡を願う事が間違いだと言うのではない。
だが、条理を逸脱した奇跡を手にしたところで幸せが約束されたわけではないのだ。
重要なのは、自分の本当の願いを直視する事。
目を背けたいような本音も含めて自分の願いを確認し、それを達成するための手段を吟味する。
自分の負の面を容認し自分の本当の気持ちと向き合わなければなければ、上っ面の願いが叶えられたところで、奇跡の成った現実と望んだ幸福（ほんね）が乖離し、いずれ決定的なズレを生む。
杏子の場合、父親を信じていたのなら、父親が話を聞いてもらえる切欠を掴む程度の小さな奇跡を願えばそれで良かった。
奇跡で集められた人間の心は、既に彼女の望んだ通りに歪められている。
彼女の父親の話を聞くために教会へ集まってきた輩には、既にその信仰を受け入れる以外の選択肢を与えられていない。
そんな連中相手では、彼女の父親の言葉は結局何も為さなかった

のと同じだったのだ。

「かつて間違いを犯したと言うなら、今度こそ自分の望む未来を見定めろ。今の自分が何を望んでいるのか、かつての自分の祈りの底にあったのはどんな望みか、目を逸らさずきっちり向き合え」

「あの時の、望み……」

撫でられるままに瞳を閉じて考え込む杏子。

その体を、マミが優しく抱きしめる。

「歪でも、醜くても、自分の本音から目を逸らすなよ。自分の本質に向き合った上で出した結論なら、俺はどんな答えでも全部認めてやる」

確かな答えを胸に、自らの手で望みを叶えようと生きたならば、後悔はあってもその結末を受け止める事は出来るだろう。

杏子はしばらく考えた後、小さく息を吐いて目蓋を上げた。

「……今さら許されるのか判らねえ」

彼女がぽつりと呟いた言葉は、決して負の感情を含んだものではない。

なぜなら、彼女は普段の彼女からは想像もつかない程、穏やかで優しげな微笑みを湛えていたからだ。

「だけど、出来るならまたあの頃の様に笑いたい。虫の良い話かもしれねえけど、誰かを助けるために戦ってたあの頃の様に笑いたいんだ」

それが、彼女の本音。

今まで否定していたかつての自分。
それこそを、彼女はずっと求めていたのだと告白する。
「なら、思う存分やってみろ。辛くなったら愚痴ぐらいなら聞いてやるし、つまらない悩みなんざ笑い飛ばしてやる。自分の手に余る事が起きたら遠慮なく頼ってくればいい」
「そうね。何かあったら私も手伝うわ。貴女、最近すごく良い笑顔をするようになってきたし、友達の事は応援してあげたいもの」
悠はマミと共に彼女の答えを肯定する。
後悔は振り切れない。
これからも彼女は迷い、葛藤を抱えて生きていくだろう。
それでも、自分を騙して無理矢理笑うのを止めるなら。
そして、最期の時に笑えるならば。
彼女が停滞から前へと踏み出した事は、祝福されるべき事柄だ。
「……何笑ってるんだよ」
今さら恥ずかしくなったのか、頬を若干赤く染めてそっぽを向きながら、彼女は弱々しく毒づく。
悠が杏子の決断を喜んでいた事が、どうやら表情に出ていたようだった。
「いや、馬鹿にしたわけじゃない。杏子が心から笑えるなら、今まで見た事がないぐらいに良い笑顔だろうと思っただけだ」
「〜〜〜〜〜〜っ！！」
今度こそ、杏子は耳まで真っ赤に染めて顔を悠の太腿に押し付けた。
その様を見て、マミは何故か悠に生暖かい視線を送ってくる。

そこに込められているのはあまり好ましくない感情だろうから、それを無視して杏子に話しかけた。

「ま、暇な時にはここに来い。一人なんてのはつまらないだろ？お前が自分の過去を否定しない限り、俺は杏子の事を全部認めてやる」

その言葉を理解するまで数秒。

小刻みに震え始めた杏子は真っ赤になった顔を上げ、右手に槍を具現させた。

戸惑う暇も与えられず、振るわれた槍は多節棍の様に幾つもの節に別れて伸び、悠の両手を拘束する。

「マミ！　コイツがこれ以上こっ恥ずかしい事を言う前に口を閉じろ！」

「はいはい」

マミはその手に一本のリボンを生み出し、それは振るわれるまでもなく勝手に悠の口を縛り猿轡となった。

「ふん。これでもう何も出来ないだろ。この変態」

「別に、そこまで恥ずかしがらなくてもいいのに」

「お前が堂々としすぎなんだよ！　少しは恥らえ！」

真っ赤な顔で杏子が怒鳴った後、二人は身動きの取れない悠の両腕を枕にして寝転がる。

火でも噴きそうな程に赤面した杏子に微笑みながらマミが悠に抱きつき、それに対して杏子はおずおずと悠の寝巻の裾を摘まんで顔を伏せていた。

「なあ、マミ。本当にこのまま寝るのか？　この変態と」
「家族と一緒に寝るぐらいいいじゃない。安心できるわよ」

こうやって二人の抱き枕になる事は、最初から仕組まれていたらしい。
拘束された以上抵抗は無意味だと悟りきっているので、諦めと共に瞳を閉じる。

翌朝。
目が覚めた時、杏子は憑き物が落ちた様に無防備な安堵の笑みを浮かべ、悠に思い切り抱きついて寝ていた。
拘束が解かれてから思いっきりからかってやったのは、様式美というかお約束として許されるべき事だろう。

第八話　新たなる一歩（後書き）

次回までまた間が空きそうです。
申し訳ありません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1150u/

東方マギカ

2011年7月23日07時24分発行